最後のカケラ

幸路　ことは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後のカケラ

【Ｎコード】
Ｎ５９４５Ｑ

【作者名】
幸路　ことは

【あらすじ】
死のう……。自殺した私は、無事あの世にたどりついた。
これで、楽になれる。全部終わった。
だけど、現実はそう甘くなかった。
死ぬ前の一週間の記憶がない、たったそれだけで私は送り返されてしまう。別の女の子として……。

さよならセカイ（前書き）

ジャンルはシリアスです。
定期的に更新できるとおもいます。

さよならセカイ

ネオンきらめく町、特に高いビルからの眺めは最高だった。毎日人は忙しく動き回って、希望と絶望を繰り返し、感情に振り回されて生きている。誰もが生きる意味を探しながら……。

「きれいだな〜」

私は思わずつぶやいた。

私はつい先ほどからずっとこの景色を見ていた。真下は道路で多くの車が行き交っていて、車のテールランプが尾を引いている。

私は自嘲の笑みを浮かべた。

それが今から死のうとしてる人の言葉？

私は重いため息をつく。

今まさに死のうとしている私は神崎深雪（しんざきみゆき）、高校二年生。

日々の生活に疲れ、今週何度目かの自殺を図っている。

「……結局私は最後まで独りだったなぁ」

私の声は秋の寒空に消えた。誰にも届かない声。

「だれか悲しんでくれるかな……だれか泣いてくれるかな……」

私は役立たずで間抜けだったけど……。

私は一息ついてから柵に手をかけた。

柵はそこら辺によくある金網で、運動神経のない私でも簡単に乗

り越えられる。

「よっ」

私は掛け声とともによじ登った。

掛け声でもかけないと決意が薄れてしまいそうだった。そしてストンと向こう側に着地する。

一メートル向こうはもうあの世への入り口だ。

……私が死んだらあの人はどんな顔をするかな。やっぱり驚く？

そして、泣いてくれるかな、後悔して、くれないかな……。もしかしたら、笑う？　目障りな奴が一人消えて嬉しいかな……？

そう思うと涙が溢れてきた。

これまで何度涙を流しただろう……。

どうして私はこんなに苦しまなくちゃいけなかったんだろう。

胸の奥に、黒い炎が灯る。暗闇に導く小さな光。

あの人は、あの人は苦しまなくちゃいけない。罪悪感にさいなまれればいいんだ。

私と同じ苦しみを味わえばいいんだ……。

ずっと苦しめられてきた人の顔が浮かんで、私は頭を強くふる。

もう、関係ない。

そして代わりに、友達の顔を思い浮かべた。

できれば、千春には泣いて欲しいな。

私のたった一人の親友だったから……。

私はゆっくりふちまで歩いた。下から風が吹き上げてくる。なんだかこのまま飛べそうな気がした。

十六年間。あんまりいい思いではないけど、楽しかったころもあった。笑ってた頃が……。

私はまっすぐ、前を見る。ぼんやりと薄暗い空間。

最後に、家族の顔がよぎる。思わず唇を噛みしめた。

……お母さん、お父さん、今まで育ててくれてありがとう。

ごめんね。おばあちゃんと向こうで待ってるから。いつでも側にいるから……。

私はゆっくり一歩を踏み出した。怖くないと言ったら嘘になる。

けど怖さより、安心の方が大きかった。

体がフワリと半分宙に浮いた状態になった。

そして視界が真っ暗変わる。

私は頭の片隅で落ちてるんだろうなと思った。

……あっ、遺書書くの忘れた。

“このトロで間抜けが！”

あははっ、ほんとに私は間抜けだ……普通遺書くらい書くよね。

もう遅いけど。

突然視界が明るくなり私に突っ込んでくる車が見えた。

あっ、これで死ねるんだ……千春、最後まで仲直りできなかった

ね。

そして私の目には鮮やかな空が映った。雲がゆっくり流れている。

あぁ。私がいなくても、世界はちゃんと回ってるんだな……。

私はそっと、目を閉じた。

――――――あれ？　え～と。私は……どうなったんでしょうか？

私は目を開けた。真っ先に目に飛び込んできたのは青い空だった。

「ここは……？」

私は体を起こし周りを見た。

私が目覚めた所は花畑でも、閻魔大王様の前でもなく、普通の道路の上だった。

私は続いて自分の体を見る。

手もあるし足もある。それに透けてもいない……。

死んでないの？

私は飛び降りたままあの道路に倒れていたのかな。

しかし、それにしては道路に血がまったくついてなかった。
道路のまわりには何も建っていない草原が広がっている……といえば聞こえがいいけど、どちらかといえば堤防なんかの草むらに近い。

私はどこに飛んできたの？

「……そんな、非現実的なことあるわけないじゃん」

私はぼそっとこぼす。

死んで頭おかしくなったのかなぁ……。

私は立ち上がった。ちゃんと歩ける。

「どっちに進めば……」

私は何か目印になるようなものがないか探した。
見渡すかぎり道路、草むら。私は少し目線を落とした。

「ん？」

私は道路に矢印が書かれていることに気がついた。
――せ、き、しょ

「関所？」

私は矢印の側に書いてあった小さな文字を読んだ。
日本語以外の文字も書かれている。

結構観光に力を入れてるんだ、と妙に感心する。
そして私は矢印の方向、関所に向かって歩き始めた。

歩いて、歩いて、歩いて、歩いた。
しかし不思議なことに私の体はどれだけ歩いても疲れなかった。
そしてもう一つ不思議なのが、かなり時間がたっているはずなのに太陽の位置がかわらないことだった。

不思議な現象のことを考えながら私は歩いて、歩いて、歩いて、歩いて、歩いて、歩いて、あるある歩いた。

「あっ」

やっとなんか見えた。あれが、関所かな?

私のなかで関所と言えば手形をみせたり、お金をはらったりする昔の関所か、高速道路の料金所しかなかった。
しかし徐々に形がはっきりしてくるそれは、表現しづらく、あえて言うのなら競馬のメインゲートの屋根つき。

「うわぁ。並んでる」

関所の前にはアリの行列と見間違えるほどの長蛇の列ができていた。

……あの人たちはどこから来たんだろう。

私がふと横を見るといつの間にか草むらの向こうに道が見えていた。

……人がたくさん歩いてる。

反対側にも道が現れていて、こちらは先ほどのまではいかないがポツリポツリ人が歩いていた。

……なんでこの道はこんなに人がいないのかなぁ。

私はついでに後ろを振り返った。

「あれ？」

よくみると、かなり遠くに人影が二つ。

なんだ、一応人は歩いてるんだ

しかしかなりの人種がいる。どんな有名な場所なんだろう。

私はそう思いながら長蛇の列に加わった。

近くで見ると、人種は様々でもほとんどが老人だった。

老人たちは和気あいあいとおしゃべりを満喫している。

「いや～。息子たちが看取ってくれましてな～。ちょっと感動しましたよ」

「いいですなぁ。わしは一人じゃった」

「私は病院でねぇ」

和やかな雰囲気ではあるが、聞こえてくる会話はどれも死に際のことだ。

え、何？　私本当に死んだの？

私はそのことに少し驚いたが、じんわりと達成感が生まれた。

そっか、やっと終わったんだ。ここはきっとあの世ね。

冷静な目で周りを見てみると、同じぐらいの子もいた。

私は苦しみから解放されたんだ。

一人喜びに震えていると肩を叩かれた。

あの世に知り合いはいない。誰だろうと思って振り返っても、後ろに人はいない。

あれ？

「ここだよん」

私が目線をさげると少し下におばあさんの顔があった。

おばあさんはめいいっぱいに顔をあげている。

あれ……？　今だよんって言わなかった？

「さあ、私について来るんだよん」

え～と……口癖？

「はっ……はい？」

私がどこに？　と聞くよりも早くお婆さんが私の手を掴んで歩き

出した。
「え？」
あっもしかして保護してくれるの？
「いっ、いたい！」
「弱い子じゃん」
お婆さんは掴まれた腕の痛さに顔をしかめる私を見てそう言った。
弱い子なのは……わかってるよ。
それにじゃんってなに？　それ若者言葉だし、もう少し年相応の喋り方があるんじゃ……。
私はおばあさんに引っ張られながら人ごみを掻き分けて進んだ。
私が連れてこられたのは、メインゲートの側にある小さな家だった。
「あの～」
「さっさと入っちゃってくれない？」
おばあさんは私の背中を押した。ずいぶんと強引なおばあさんだ。
「あの。おばあさんは……？」
「何を言ってるんだよん、私はぴちぴちの八十六歳よ！」

私は思わず噴き出した。
いやいや。八十六はずいぶんおばあちゃんよ？
「あらん？　含み笑い？　いやねん……私もよくやったわ」
大丈夫、これが八十六歳のおばあさんだと思わなければいいだけ。
「そこに座っちゃって」
「あっ、はい」
私はお婆さんに言われたとおりに側にあった椅子に座った。
そして部屋を見渡した。部屋のつくりは西洋っぽい。家具も必要最低限のものしかなく、近代の産物、テレビや冷蔵庫はなかった。
「あんた名前はなんちゅーのん？」
お婆さんは戸棚からティーカップをだした。
「私は神崎深雪です」
「ふ～ん深雪ちゃんっていうのん」
「はい……あの、それでここはあの世なんですよね」
「そうよん。自殺したでしょ」
お婆さんはお茶を淹れる手を止めて言った。
ちなみにお茶は紅茶のようだ。

「まあ。もう少し厳密に言えば、あの世とこの世の境目よん」

「境目……」

「そう、ここを通れば死者の世界よん」

おばあさんは茶目っ気たっぷりに言いながら私にティーカップを渡した。厚化粧が無駄に光る。

私はそれを受け取って一口飲んだ。なかなかよい香りがしている。

「うっにがっ」

だが私はあまりの苦さにむせた。紅茶を飲むことは少ないが、こんなに苦かっただろうか。

「あらん？　ちょっと苦かったみたいね」

お婆さんは角砂糖を数個カップに入れてくれた。私はスプーンでくるくると混ぜる。

「あの、それで私はなぜここに？」

私はおそるおそる聞いた。きっとこのおばあさんは管理人だろう。

「それがねぇ……あなた記憶をなくしちゃってるのよん」

おばあさんは頬に手を添え、困ったポーズ。

「はい？」

今この人何て言った？

「時々いんのよね、記憶なくして死ぬやつが」

「……え？　記憶ならありますけど？」

神崎深雪、十七歳　好きな食べ物りんご。

「そういう記憶じゃないのよん」

お婆さんは私の思ったことが分かったらしく、指を振る。

「どういうことですか？」

「死ぬ前の記憶がすっぽりないのよん」

死ぬ前の記憶ならある。

いつものように学校で散々やられて、ビルの屋上にのぼって……。

「記憶は……ありますよ？」

「ないのよん」

「あります」

「ないのよん」

「ある！」

私はあまりのもどかしさに声を荒げた。

こんなに大きな声をだしたのは久しぶりかも……。死ぬと人は変わるのだろうか。

「死ぬ前の一週間分の記憶がないのよん」

お婆さんはため息をついた。

「……死ぬ一週間前？」

死ぬ一週間前？　普通そんなに覚えてないんじゃ……。

それに覚えていたっていつもと何の変わりもないだろうし

「ここでは、記憶のないものは送り返すんだよん」

「送り返す。え？　もしかして、もとの場所にですか？」

「他にどこがあるのよん」

私はうろたえた。

せっかく死んで解放されたのになんでまた戻んないといけないのよ。

「そんな……なんで？　ほんの少し記憶がないだけじゃん！」

「このままいくと、あなたは怨霊になっちゃうのよん。それは未然に防ぐのが決まりなんだよん」

お婆さんは怨霊の部分を強調した。

「私が怨霊なんかになるわけない！　だから私をあんなとこに帰さないで！」

「あなたは彼女達を恨んでるのよん」

お婆さんはきっぱりと言った。

さすがに私は返す言葉がなかった。

……確かに私はあいつらを憎んでいた、でももうどうでもいいのに

「でも！」

私は持っていたティーカップを乱暴に机に置いた。

「もう遅いのよん。あなたはそれを飲み干してちゃたのよん」

「……はい？」

私は聞き返した。すっごく嫌な予感がする。

「そのティーカップの液体はあっちに戻るための薬だよん」

「うそ！」

私はあまりの衝撃に立ち上がった。

「ほんと、あなたは今からあっちに戻るのよん。秋宮愛里（あきみやあいり）という女の子になって、そんで記憶を取り戻してくるのよん」

「えっ、ちょっとまって、もっとわかりやすく！」

「タイムアウト」

私がお婆さんに駆け寄ろうとしたとたん、体が軽くなった。下からふわりと生暖かい風を感じる。

「え？」

私が驚いて下を見ると床にはぽっかりと穴が開いていた。しかも穴の中心に渦突き。

私は当然ながら重力に従って落下する。

何よこの非現実的なものは！　私はファンタジー大っ嫌いなのに～。

そもそもなんで死んだのに生き返んなきゃいけないの！

これが、完全な現実からの逃亡の行きつくはてだった……。

新しい私

ここに来る前と同じように私は落ちていた。
違うのは真っ黒から真っ白になったのと非常に嬉しくないが、連れがいること。
上を見上げるとおばあさんが頭から落ちているのが見えた。厚化粧が目に痛い。
よかった……私は頭からじゃなくて、また死んじゃうよ。
もう死ねねぇよ。
懐かしいお兄ちゃんの声で突っ込みが入った。
きゃ！　人の思考回路に入ってこないで！
私は忌々しい兄の顔を頭の中から追い出す。
そういえば私はあの日、お兄ちゃんと顔をあわせていないや……。
最後に一言ぐらい言いたかったな。
あっ、生き返るんだっけ？
「ほら！　もうちょっとで出口よん」
おばあさんの叫び声に私は下を見る、依然真っ黒で何も見えない。
「出口ってどこに出るのよ！」

「すぐにわかるよ！」

「ちょっと！」

その時、目の前に景色が広がってきた。
車、木、ビル。それはどんどん近付いてくる。

「町？」

そして部屋……。

「きゃ！」

私は急に体が重くなった気がした。
部屋がどんどん近くなっていく。

ぶつかる～

私はぎゅっと目を瞑った。

……まだ？

体は痛みを受けるために構えたままだ。

「何を固まってるのん？」

おばあさんの声がした。
今度は上からではなく隣からだった。
私はゆっくり目を開けた。そして声を漏らす。

「うわ～」

私は部屋をぐるっと見渡した。クリーム色の壁紙、花柄のベッド。乙女色一色の部屋だ。

「ここがあなたの部屋だよん」

へ～ここが～。

まだよく事態が飲み込めていない私は不覚にもうなずいてしまった。

「え？　今私の部屋って……私の部屋はこんなんじゃない」

「あなたの部屋だよん」

「？」

「あなたの新しい部屋だよん。あなたは秋宮愛里（あきみやあいり）、高校二年生、お父さんとお母さんとの三人暮らし」

「私と同い年か～」

「そう、あさってから四つ葉学院に転入」

「へ～四つ葉学院。メルヘンチックだね……それ私の学校じゃん！」

まずい。頭がはたらかない。不覚にものりつっこみとかしちゃった……。

「ついでにあなたはもう死んでいる、よん」

どっかで聞いたことのあるような台詞をお婆さんが口にする。

あっよくお兄ちゃんが見てたような……は？

「私は死んじゃってるの？」

「そう」

「死んだ私がのこのこ学校に行くのはどうかと思うんだけど」

「大丈夫よん」

お婆さんは私を姿見の前に移動させた。

「え？」

私はそれを見て、自分の目を疑った。

鏡に映っていたのは、私ではなく知らない女の子だったから。しかもかなり可愛い。

「どうだい？　これなら問題ないのよん」

鏡の中に映るおばあさんは意地悪な笑みを浮かべていた。

「で、でも」

「愛里、どうかしたの？」

突然声とともに入ってきたのはカールがかかった茶髪の女性。

「わっ！　か、勝手に入ってこないでよ！」

私は驚きのあまり声が裏返ってしまった。

「あっ……ごめんなさい。いつも言われてたわね」

どこの家もそうなのか、と私は妙に納得する。

そして横にいるおばあさんを思い出した。

やばっどうしよう……。

どう頑張ってもごまかせない。私の背中に嫌な汗が流れた。

私が助けを求めておばあさんを見ると、当の本人は慌てることもなく女の人を見ていた。

「それよりなんかぶつぶつ言ってたみたいだけど大丈夫？」

「だ、大丈夫！　心配しないで」

私の心臓は爆発寸前、冷や汗まででてきた。

「そう？　ならいいけど……」

まだ釈然としない様子ではあったが、女の人は出て行った。奇跡的におばあさんには触れてこなかった。

足音が聞こえなくなると、

「は～びっくりしたぁ」

私はほっと胸をなでおろした。

「あの人が愛里の母親、つまりあんたの母親だよん」

「へ～、あの人目が悪いのかな、おば、お姉さんのこと全然見えてなかったし」

「さぁ、視力までは知らないけど私は普通の人間にはみえないんだよん」

お婆さんは得意げに胸をはる。

「見えないの？」

「そうだよん、いわば幽霊だからねん！」

お婆さんは私に向かってウインクをした。

「ゆ、幽霊？」

私はおばあさんのウインクとその言葉に思わず後じさる。

私の嫌いなものは一に幽霊二に幽霊三，四は人の恨みだ。ちなみに五は生魚……。

「おや、幽霊が嫌いなのん？」

お婆さんの問いかけに私は力強く首を縦にふった。

「けどあんたも幽霊だよん？」

「え？」

「こっちに戻ってきた時点であんたはとっくに幽霊なんだよん」

お婆さんはやや呆れ顔だ。

「う、うそ……」

私はがくっとその場に座り込んだ。

私が幽霊になっちゃうなんて……最悪。

「それと、自分の正体ばらしちゃだめよん。もしばらしたら、シュワシュワ、ポンッだからねん」

おばあさんは夢にでてきそうなほどの気味の悪い笑みを浮かべた。

シュワシュワポンって、私はどこぞの人魚なわけ？

「ま、頑張るんだよん」

お婆さんは手を振り、スッと消えた。

「え？」

私が見上げた時にはもうお婆さんの姿はなかった。

う、うそ……記憶がないと言われ、こっちに戻されたあげく放置？

しかも流し流され秋宮愛里になってるし～

なんでこうなったのよ！
私はどうしようと天井を見上げる、たすけて～神様～。
「愛里～ご飯よ～」
幽霊が神頼みをしようと思った時、さっきの女の人の声が聞こえた。
「ご飯かぁ」
そういえばあの人はお母さんなんだ。
「は～い」
私は返事をすると部屋をでた。
とにかく、私は秋宮愛里、こうなったらとっとと記憶を見つけてあの世にもどってやる！
私は決心して階段を下りた。
あっ……無意識に下りちゃった。
「愛里何ぼ～としてるの？　早くおいで」
どうやら一階で正解だったらしい。
「は～い」
私は返事をして椅子に座った。
テーブルに並べられた料理はどれもおいしそうだった。

「いっただったきま～す」

もくもくとはしを動かす。

「おいし～」

神崎深雪（しんざきみゆき）からは考えられないほどの明るさで言った。

さすがは秋宮愛里になっただけはある。私ってけっこう演技力ある～。

私の正面では私の母親が笑みを浮かべながらご飯を食べている。

「どうかしたの？」

「別に？　愛里がめずらしく上機嫌だから」

私はうっとジャガイモをつまらせた。

「そっそう？」

うわー墓穴ほった……。

「そんなにあの高校に行きたかったの？」

「う、うん」

あの高校って四つ葉学院のことだよね。

「そう……友達は、大切にしなくちゃね」

何のこと言ってるのか全くわかんない。
私は急いでご飯を食べて、二階に駆け上がった。
これ以上一緒にいたらボロが出る！
自分の部屋のドアを開けると、勉強机の椅子に座った。
私は椅子を回転させながらこれからどうするかを考えた。
とにかく、明後日は学校だからそれまでにこの家に馴染まなくっちゃ……。
そういえばまだ父親は帰ってなかったっけ？　帰りが遅いのかなぁ。
ひとまず、愛里がどんな人かってのを知らないと駄目だよね。
私は机の抽斗を開け手がかりがないか捜してみた。
日記とかないかなぁ……。
ごそごそとお世辞にもきれいとはいえない抽斗をあさる。ちょっと泥棒になった気分だ。
「愛里は、整頓が苦手みたい」
私は次の抽斗にかかった。
何これ……アルバム？
私は表紙をめくった。
……愛里誕生、十一月三日。

私は写真と共に貼られているメモに目を通す。愛がどこまでも続くようにという願いを込めて愛里と命名と書いてあった。

そんな由来が……。

ちなみに私は冬に、しかもその朝雪がたくさん降ってたから深雪。なんとも単純な由来……。

私は愛里が少しうらやましくなった。

そして何よりも可愛い、赤ちゃんは皆可愛いけどやっぱ可愛い。

私はぱらぱらとめくっていく。

一歳、二歳……どれも可愛い。入学式に遠足、遊園地もある。卒業式に……誕生日パーティー。

どれにも幸せそうに笑った愛里がいる。

いいな……。

私は心の中でため息をついた。

私の写真はあんまりない、バカ兄のはあっても……。

私はアルバムから目を離し、窓の外をみた。

それは、両親が共働きになってどこへも連れて行ってくれなかったのも関係があるのかもしれない。だけど、子ども心に寂しかったのを覚えている。

愛里は、幸せだったんだろうな。

両親に愛されて、友達も沢山いて、私よりもずっと……。

そう思ったとたんジワリ、涙が浮かんできた。

そういえば……お母さん達、今どうしてるんだろう？

いつか、見に行ってみよう……。

愛里と私　そして学校

私が愛里になって二日目、朝起きたら母親はいなかった。

朝ごはん何食べよっかな。

私がそう思いながらテーブルに近づくとそこにはサランラップがかけられた朝食があった。

朝ごはんがある。

私にとってそれはありえないことだった。私の家は皆起きる時間がばらばらだから、

朝食は各自好きなものを作るようになっていたのだ。

なんか新鮮だなぁ。

私は椅子に座ると、さっそく食べ始めた。

私は牛乳の入ったコップを片手にパンを食べながら、この家はパン派なんだなぁと思った。

私の家は断然ご飯だ。

――今日、何しようかな……。

私はテーブルに置いてあったリモコンでテレビをつけた。

愛里の部屋をもうちょっと探ることにして、あっ、この家もよくみなくちゃ……あと。

「十一月二十五日土曜日、今日のニュースは……」

テレビでは見慣れたアナウンサーが最近のニュースを読み上げていく。

……ん？　十一月、二十五！？

私は驚きのあまりコップを落としそうになった。

え、え～と、私が自殺したのは十一月……じゅう、十五、今日は二十五……うそ！　私が死んでから十日も経ってるの？　二日ぐらいかと思ってた……。

ひそかに自分の葬式を見たかったのに。

私は小さくため息をついた。

ニュースはこれといって重要なことは流れていなかった。

やっぱり、何にも変わんないんだ……。

私は少し悲しくなって電源を切った。

目まぐるしく日々は過ぎていって、もう転校初日になっていた。

「ねぇ、ちょっと、もう朝だよ？　起きて！」

耳元で女の人の声がした。

……お母さん？

「うるさいなぁ……あと少しくらい」

私は寝返りをうって声がした方に背を向ける。

「今日は学校でしょ！　学校！　深雪！　さっさと起きなきゃ遅刻する！」

「わかったよ～」

私は目をこすりながら体を起こす。時計を見てみるともう七時五十分だった。

「きゃ！　お母さん！　なんでもっと早くおこしてくれなかったの！」

私は横を振り向いたがそこに人の姿は無い。

あれ？　たしかこっちから声が……。

「目覚ましくらいかけなよ！　それでも高校生なの？」

声は少し下から聞こえていた。

私は視線を下に落としていくと、ベッドにうさぎのぬいぐるみが仁王立ちをしているのが目に入った。

「……え？」

私はしばらくそれをじっと見る。記憶をたどってもこんなものを

ベッドに置いてはいない。

「ほら深雪！　ぼーとしてないで学校にいく！」

「に、人形が喋った～！」

私は驚いて飛びのき、思いっきり壁に頭を打った。

「きゃ～、痛い」

「……深雪って以外とドジ？」

「……え、どうして私の名前を？」

私はのろのろと起き上がった。仕度をしないと本気で間に合わない。

「私は愛里、あなたが入っている体の持ち主よ」

人形は腰に手を当て、少しのけぞりぎみに言った。

「えっ？　愛里？」

私はクシを持つ手を止めて人形を振り返る。

確かに考えてみれば愛里はどこ行ったんだってことになるもんね。けど、なんで人形に？

人形、いや愛里はトテトテと私の方にやってきた。

人形が歩いてる。背骨も無いのに……。

「なんで、人形？」

「……本当は動物なんだけど。家には何もいないからよ。しょうがないじゃない！」

逆ギレに近い愛里の返事だ。

「うぁ。スカーフが曲がった」

焦るとろくなことがない。

「ちょっと深雪、私の体を使うからにはちゃんとしてよね！」

「分かってるけど……」

馴染み深い制服を着た鏡の中の私を見てため息をついた。

あーもう……なんで記憶なくなるのよ。

そのせいでこんな面倒なことになってしまった。けどこれといって思い当たるとこないんだよなぁ。

不思議……あのおばあさん、うそついてるんじゃないよね。

はぁ、なんか憂鬱……。

「私のことは深雪が帰ったら存分に教えてあげるから、さっさと行ってきて。初日から遅刻なんてみっともないじゃない！」

「わかったって！」

私は人形にせかされ家を出た。ちらっと朝食が見えたけど今はとても食べられる状態じゃない。
あぁ、おいしそうなご飯が……。
無念、私は学校へと続く道を全速力で走りぬけた。

私が通っていた四葉学園はメルヘンチックな名前だけど普通の高校。

「さぁ、おいで」

声につられて視線をあげると元担任が立っていた。そしてまた担任になる。

「はい」

「さ、みんな席に座って！　転校生を紹介するから」

先生は教壇に立つと私を側に立たせた。
私は愛沢さんを見た瞬間、心臓が飛び跳ねたのがわかった。頭では解っているのに、体がすくむ。
そして胸の奥にゆらりと憎しみがこみ上げる。

「秋宮愛里さんだ。一言どうぞ」

「愛里です。よろしくお願いします」

私は声が裏返りそうになるのを抑えながら自己紹介をした。

かわいー、足も細いね、かわいー、すっげ～

私の耳に様々な声が届く。

だよね、かわいーよね。私もそう思った！

「秋宮の席は……甲斐の隣だな」

甲斐さんの隣。深雪（わたし）の席だ。

私はゆっくり自分の席に座る。少しガタガタで、ところどころ傷がいった机だ。

なつかしい……。たった十日ぐらいしかたってないのになぁ。

私の席は窓際で、そこからは広いグラウンドが見える。

「ねぇ、ここ、だれか前に座ってたの？」

私は隣の甲斐さんに小声で聞いた。まずは情報を集めないといけない。

彼女は驚いた顔をしてそれから言いにくそうに口ごもった後、

「実はね、神崎さんの席だったんだ」

と答えた。

「神崎さん？」

私は平静を装って聞き返す。

「うん、彼女事故で死んじゃったんだ。つい、二週間くらいまえかな」

「事故？　車にでも引かれたの？」

「詳しいことは知らないけど、そんな感じだったと思う」

彼女は特別悲しそうにするわけでもなく、楽しそうでもなく、遠い過去を話すような感じだった。

私のことは事故になってるんだ。やっぱり体裁のためかな？

「……そうなんだ」

別に、悲しんで欲しいと思ってたわけじゃないけど、なんか、寂しいな。私、どこか期待してたのかな……。

「ちょっと～見た見た？三組の転校生！ちょー可愛いらしいよ」

「ねぇねぇ転校生ってどれ？」

休み時間、教室はうるさかった。私は耳を塞いで逃げ出したいのをこらえ、大人しく椅子に座って、笑顔を返していた。

「どこから来たの？」

「モデルしたことある？」

「部活なんかしてた？」

と、さまざまな質問が私に向けられた。私は考え付く限りで、後は適当に答えておいた。

どうせ、だれも愛里のことを知らないんだから。

そして家に帰ると、愛里から愛里講座を二時間も聞かせられた。愛里の性格から、好きなもの、嫌いな食べ物、日課や好きな人のタイプまで……。

そのせいで次の日は睡眠不足となった。

お墓参り

翌日、深呼吸してから教室に入ると真横から声をかけられた。

「おはよ」

私が身構えつつそちらを向くと、それは橋本晶君(はしもとあきら)だった。

「あっ、おはよ」

橋本君は運動神経がよく、女の子にいつも囲まれている。私がいじめられている時も時々話しかけてくれた。まともにかえしてあげられなかったけれど。

「そんな驚くなよ。この学校でわかんねぇことがあったら俺に聞けよ？　俺ケッコー詳しいんだ」

「あっ晶！　お前、秋宮さんの前だからっていい人ぶんな」

すぐ隣にいた男子が軽く橋本くんの首を絞める。

「橋本が学校に詳しいのはよく抜け出してるからだろ？」

くすくすと私の後ろから楽しそうな声が聞こえた。私がはっとして振り向くと早川凍太(はやかわとうた)君が立っていた。

「うるせ～早川こそめずらしく今日は早いじゃねぇか」

早川君は学年で一番かっこいい。けど早川君は女の子にはいつも冷たい目で、無愛想だった。
私はぼうと早川君を見る。目の保養だ。
「そうか？　それと秋宮、ここに立たれると邪魔なんだけど」
「えっ、あ、ごめん！」
私はあせってその場から飛びのく。先ほどとは打って変わった冷たい声だ。
「あいかわらず女にはつめてーな」
橋本君が早川君を目で追いながら呟いた。
私も早川君を目で追いながら席に着いた。
はぁ、なんか、こうもいつもと変わってないと自分が死んだって感覚が無くなっちゃうな。
「おはよ、愛里ちゃん」
その声に顔をあげると、南千春（みなみちはる）が立っていた。にっこりと笑っている。
「おはよう」
私は久しぶりに言葉を交わす親友をじっくりと見た。
なんか、やせた？　ちょっときれいになってるような。

「どうしたの？　愛里ちゃん」

「ん？　ううん、なんでもないよ千春」

「あれ？　なんで私の名前知ってるの？　言ったっけ？」

千春は人差し指を口元に添えて首をかしげた。これは彼女の癖だ。

しまった～！　私は昨日転校してきたばっかりだった！

「い、いや、昨日そう呼ばれてたから」

私は笑ってごまかす。

「そうだっけ？　千春って呼ぶ人少ないんだけどなぁ」

呼ばれてたっけ？　と千春はまた首をかしげた。

「うん、呼ばれてたよ。そういえばさ、この高校って学食あるんだって？　私のとこなかったからちょっと驚いちゃった」

「そうなの？　ここの学食はなかなかおいしいよ」

私もよく食べるんだ、と千春は得意げに説明してくれた。その中には私が知らないこともあった。

こんなに楽しそうにしてる千春、久しぶりにみる。私がいなくなって、明るくなったみたい……。

「楽しみだな～」

私は無理やり笑顔を作った。これ以上考えたら涙が出てしまう。

その時本鈴が鳴った。

千春はじゃあね、と軽く手を振って自分の席に戻っていった。

私が死んでから、変わったものは何も無いと思っていた、だけど変化は確実におこっていた。

「ねぇ、最近沙那付き合い悪くない？」

「だよねぇ、話しかけても無視されることもあるしさぁ、なんかムカつく」

廊下を歩いていた私の耳に入ってきたのはそんな会話だった。

愛沢沙那（あいざわさな）、私をいじめた張本人。ゆるいウェーブがかかった茶髪のお嬢様系で男をとっかえひっかえしていた女の子。

愛沢さんの方は見ないようにしていたからそんなことには気がつかなかった。もしそれが本当なら、どうしたんだろう。

話しかけても無視するなんて、あの愛沢さんからはちょっと考えられない。

話しかけてほしくないのならはっきりと言うだろうし、気にくわないといじめるだろうから、私みたいに……。罪悪感でも感じてるのかな？

私は少し気になって教室に帰ると愛沢さんの姿を探した。案の定、愛沢さんは自分の席に座っていた。周りには誰もいない。

変だな、いつもなら取り巻きが三、四人いたのに。
私は警戒しながらも愛沢さんに近づいた。心臓がきゅっと締まる。
愛沢さんは私に気付いたのかうっとうしそうな視線をこちらに向けた。
「愛沢さんだよね？」
「なんかよう？」
あまりにも素っ気無く返されたから、私は言葉につまる。
「え……と、この学校のことよくわかんないから教えてくれないかなぁと思って」
私はなるべく下手にでた。ここで反感をかったら元も子もない。
「別にあんたに教えるようなことは何も無いわよ。おもしろくも何にも無い場所なんだから」
愛沢さんはついっと私から視線を外すと、窓ぎわの集団を指差した。
「あんたはあっちにいけば？　あっちの方がお似合いよ」
「別に、私は集団好きじゃないよ。ねぇ、神崎深雪さんって知ってる？」
私は何気なしにそう訊いた。せっかく生き返ったのだから、復讐

するのも悪くない。

誰もあなたを責めないだろうけど、私は知ってる。

私はあなたのせいで死んだのだから……。

素っ気無く返すと思ったけれど、意外にも愛沢さんは驚いた顔をして、その顔をじょじょに苦々しそうな顔に変えていった。

「なんであんたが深雪のことを知ってるの？」

落ち着いた口調だけど、その声には怒りが混ざっていた。

「クラスの人が話してるのを聞いたの。事故で死んだんでしょ？」

「らしいわね、私もよく知らないわ。もうそいつの名前を出さないで、嫌いだから」

嫌いだから。何度も聞かされた言葉だけど面と向かって言われるとやっぱ傷つく。

「彼女、自殺じゃないの？」

私は勇気をだしてその言葉を口にした。

「うるさいわね！　事故だって言ってるでしょ。もう私に近づかないで！」

愛沢さんは突然大声を出して立ち上がった。教室がシンッと静かになる。

「こんど私に話しかけたら。あんた、殺すよ？」

そう言い捨てると愛沢さんは教室から出ていった。

「どうしたの？　気にしなくていいよ？　沙那ちゃんこの頃機嫌悪いから」

呆然としている私の肩を側にいた女子が叩いた。

「いい加減にしてほしいよね。何があったかは知んないけどさ、ストレスを学校でぶちまけてほしくないよね～」

なんで、怒ったんだろう。心あたりでもあるの？　ふふ、いい気味。ちょっとは苦しめばいいのよ。

胸がすっとして、私は席に着いた。授業はすぐに始まる。

私は早く、記憶を見つけなくてはいけない……。

学校も無事終わって、私は久しぶりに自宅の方へ行くことにした。こっちに戻ってきてから、家族のことが心配だった。

みんな元気かな？

私は腕時計で時間を確認する。

三時半。家にはまだ誰もいない時間帯だ。

このまま家に行くのも……そうだ、墓地に行こう。あそこなら家からも近いし、おばあちゃんにお参りしなくちゃ。

私はゆっくりと町を散策しながら墓地へと向かった。
墓地はそんなに大きくなく、所々雑草の生えているような寂しい所だ。
おばあちゃんが死んだときにここで大泣きした記憶がある。おじいちゃんは生まれる前に死んでいたから、その分私はおばあちゃんっ子だった。

そういえば墓掃除は毎回私の担当だったなぁ、最近来てなかったから、荒れ放題になってるよね。

家の墓が見えてくると、私は少し首をかしげた。
墓がきれいだ。その上、花がたくさん置いてある。
墓の前に立って見ると、見事なものだった。苔一つ生えていない墓石、その周りにたくさんの花。

誰か死んだの？

私の胸に嫌なものがよぎった。

おばさんは元気だし、いや、でも突然の事故ってことも……まてよ？
事故で死んだのは……私だ！　もしかしてこれ、私への花？

私はまじまじと花束を見る。

ちゃんと悼んでくれてるんだ。なんか嬉しいな。お線香、灯しておこ。

私は側に置いてあった線香に火を灯し、立ててておいた。静かに顔

の前で合掌をする。

おばあちゃん、私戻ってきちゃった。あの世への境目は長い道なんだね。

おばあちゃんもあそこを通った？　絶対そっちに行くから、待っててね。

私は、ゆっくり目を開けた。ゆりの香りの奥に、私たちの墓がある。

私の体はもう無い、それなのにこうしてここに立っているなんて、変な気分……。

私は視線を腕時計に落とした。時刻は４時になろうとしていた。

そろそろ家を覗いてみようかな……お兄ちゃんも、帰ってるだろうし。

「頑張るね、おばあちゃん」

私はにこりと笑うと墓石に背を向けて歩き出した。

私の家は住宅地の一角にある。落ち着いた住宅地で、夜は人が消えたのかと思うくらい静かだった。　すぐ近くに公園があって、小さい頃はよくお兄ちゃんと遊びに行った。そこらじゅうに思い出がある。

私は家の前に立った。私がいなくなった家、そう思うと急に家が

静かになったような気がした。
不審者みたいだな、と思いながら家を見ていた。インターホンは押せなかった。深雪はもう死んで、私は愛里になった。どんな顔で会えばいいのか、何を言えばいいのかもわからなかったからだ。
しばらく眺めていると、窓に人影が写った。
私の部屋だ……お兄ちゃん？
人影は、窓に寄りかかるようにして部屋の中を見ているように見えた。
何を考えているのか分からない。だけど、見ていると胸が苦しくなった。
見たくない、その先を、考えたくない……。
「お兄ちゃん……」
私はしばらくその後ろ姿を見ていた。
ほんとに、ごめんね。いつか話すことが出来たら……お兄ちゃんのギャグを笑ってあげよう。私が出来なかった分、愛里が……。
なんだかここにいるのが辛くなって、私は逃げるように立ち去った。
夕暮れがあたりを染める。暖かい光が胸に染みて、血が滲むようだった……。

友だちと買い物へ

君は、なんのために生きてる？
君は、生きていることを楽しいと思う？
君は……。

なんのためかなんて、わからない。楽しいかどうかもわからない。そんなこと訊かれたって困る。

私は問題用紙とにらめっこをしていた。
倫理の時間、先生はこのプリントを配って答えを書き込むように指示した。
私の回答は上からハテナマークが並んでいる。

そもそも、生きていることを楽しいと思っていたら、自殺なんてしない。それに、しいて言えば私は記憶を取り戻すために生きている。こんなこと書くわけにはいかない……。

そして私は最後の問題で手を止めた。

君は、あの世があると思いますか？　あるとしたらどんな場所ですか？

あの世か、これなら答えられる。私は見てきたんだから。

私は自信満々で答えを書きこんだ。

「ねぇ、秋宮さん。答え書けた？」

授業が終わり、隣の甲斐さんが疲れきった顔で訊いてきた。

「う～ん、ほとんどかけなかった」

「だよね～。正直あの世なんかわかんないよ」

甲斐さんは少しのびてから、窓際の集団に駆け寄って行った。口の動きからして、私に言ったのと同じこと言っているらしい。

もう転校して来て三日がたった。

話しかけてくれる人はいるけれど、特定の友達はまだいない。愛里となっても私は深雪だから、それは仕方ない。

「愛里ちゃん」

私がふと顔をあげると千春が私をのぞいていた。

「あっ、千春。なあに？」

なぜか、というか当然、千春とはすぐに仲良くなった。自分の中では友達までもう一歩というところまで来ている。

「今日の放課後一緒に買い物しない？」

唐突にそう誘ってきた千春を見ながら、そういえば買い物好きだったなぁとぼんやり思った。そしてその衝動はいつも突然だった。

「うん、いいよ！」

私は笑顔で返事をする。深雪のことをきくチャンスでもあるしね。

「ありがとう。じゃあ、三時半に駅前ね」

千春は嬉しそうに席に戻って行った。

千春と買い物か～久しぶりだな。

私は窓の外に広がる町を見た。思えば、買い物じたい久しぶりだった。

私が駅前に行くと、すでに千春はいて、ベンチで座って待っていた。全体に黒が多い服を着ていて、余計大人っぽく見えた。

「ごめん、ちょっと遅れた」

「いいよ、急に誘ったんだもん。その服、すっごく可愛いね。よく似合ってるよ」

千春は私の服を眺めそう感想をこぼした。

実は、私が遅れた原因はこの服にある。部屋のクローゼットを開けるとそこにはたくさんの服が並んでいた。私はその中から愛里に文句を言われながらもやっとましなものを探し出し、急いで着てきたのだ。

「それで、今日は何を買うの？」

ひとまず私たちはデパートに向かって歩き出した。

「誕生日プレゼント。友達にあげるんだけどよくわかんなくて」

千春ははにかんだように笑った。

「へ～誕生日プレゼントかぁ、その子どんな子なの？」

「えっとね～よく本読んでて、すっごく優しくて……あんまり派手なのは嫌いかな？」

私は千春の言葉をもとにその女の子を想像する。

「う～ん、本が好きならブックカバーとか……栞とか？」

「栞か～そういうのもいいね」

「千春は何をあげようと思ってたの？」

「……ブレスレットとか、なんか身につけられるものもいいな～って」

千春は少し視線を落として、呟いた。

「ブレスレットかぁ、いいと思うよ？　……千春？」

「えっ、なんでそんな顔してるのよ。ショッピングよ？　楽しまなきゃ！」

千春の曇っていた顔は一瞬でいつもの笑顔に戻った。

「うん、そうだね！」

千春……どうかしたのかな。

なんだか思いつめたような千春の顔に少し不安になった。

私たちはデパートの入るとまずアクセサリー売り場に行った。

「大人しい子なんだよね」

私は可愛らしいブレスレットを見ながら千春に訊いた。

「そうだよ。やっぱり青かなぁ。イメージ的に」

「青かぁ……けど女の子なんだし、ちょっとぐらい可愛くてもいいんじゃない？」

愛里の小物は見たかぎり、ピンクばっかりだった。

「ピンクとか？　なんか、ひくざまが目に浮かんじゃうんだけど」

千春は苦笑いを浮かべた。

私はピンクの物を受け取って眉をひそめる女の子を想像して思わず笑ってしまった。

「それはまずいね」

「よねぇ……青の、可愛いめくらいがちょうどいいかも」

千春はう～ん、とうなりながら、棚から一つのブレスレットを取った。

それは青い石と淡いピンクのハート型の石が交互に並んでいるブレスレットだった。

「へ～可愛いじゃん。青色だし」

私はブレスレットを見ながら、千春はセンスいいな～と感心していた。

「気に入ってくれるかなぁ」

「大丈夫だって、人から物をもらって嬉しくない人なんていないよ」

私は自信を持って、と千春の肩を叩いた。

「そうだよね、決めた。これにする」

千春はそう言うとレジに向かった。

私は千春の後姿を見ながら、今自分は愛里なんだなぁと痛感していた。私はまだ千春の肩の感触が残っている右手を見る。

この感触を知っている気がした。

深雪だった時は人に触れようとなんてしなかったのに……。

「愛里ちゃん！」

ふと気がつくと目の前に千春が立っていた。手には手提げ袋を持っている。

「他になんか見て回らない？」

「うん、いいよ。あっ、本屋見たいなぁ」

そろそろ新しい本が欲しい。

「本屋？　いいよ、私もちょうど本見たかったんだ」

私たちは人ごみの中を本屋まで移動した。

私は、人ごみが苦手だったからデパートには数えるくらいにしか行ってない。ここの本屋を見るのも初めてだ。

「おっきいね」

さすがにここまでとは思わなかった。右を向いても左を向いても本、本、本！

町の商店街の本屋くらいしか行かなかった私にはすっごく心が躍った。

「でしょ？　でも多すぎて読みたい本がなかなか見つからないんだよね」

呆れ半分の千春の言葉に私は笑って返す。

「けど、発掘みたいでおもしろいじゃん」

私は棚を片っ端から見ていった。私の好きなジャンルはノンフィクションとミステリー、それだけでもかなりの数だった。

うわ～、読みたい本がたくさ～ん。

私はその中から『実証、死後の世界』と『千ばやいく何』という本を取り、レジに向かう。その途中で千春に合流した。

「愛里ちゃんはどんな本にしたの？」

千春は興味深げに私が持っている本を見ていた。私はこれ、と千春に見せた。

「……死後の世界に千ばやいく何？　愛里ちゃんってこういうのが好きなの？」

千春は見るからに意外そうな顔をしていた。

「ちょっとね、おもしろいかな～って」

その時、私はかばんから財布を取り出そうとした手を止めた。

まてよ？　今、私は愛里。ということは、これは愛里のお金だよね。

私が使っちゃだめなんじゃ、てか怒られそう……。

いや、けど、本も買いたい。

よし、怒られたとて、相手は人形！　愛里にもこの本のすばらしさを教えてあげよう！

ということで、私はそれらを買って家に返った。

しかし現実はそんなに甘くない。

「なに？　この本！　ぜんっぜん可愛くないじゃない！　しかも何？　千ばやいく何って、センスがないにも程があるじゃない！」

愛里の本棚を見る限り、ファンタジーが好きなことは気付いていたけどここまで非難されるとは。

「女の子はね！　あの挿絵に惹かれるものなのよ！　それに死後の世界ってあんたねぇ、一度向こう行ってるんでしょ？　ならわざわざ読む必要ないじゃない！」

背丈十五センチのうさぎがキャンキャンと吼えた。愛里の声がもともと高いのかそれとも人形だからなのか耳が痛くて仕方がない。

「いや、けど人にはそれぞれ好みというのが……」

私はおずおずと反論を始める。

「そりゃぁちょっとはあるでしょうよ！　でもね、ちょっとは高校生らしくしなさい！」

「高校生らしいって……？」

そんなこと言われてもね。

「早く記憶見つけなさいよ！　私の大事な高校生活をあげてるんだから！」

そして愛里の説教はどんどんわき道にそれていった。

その大演説の最後に、

「そうだ！　深雪、あんたに課題をあげる」

と威勢よく言い放った。

私はもう反論する気力もなく、目で続きを促す。

「彼氏を作りなさい！」

「……はい。えぇぇぇぇ！」

私は愛里を掴みあげた。

「なんでそうなるのよ！」

「高校生にもなって彼氏の一人や二人いないなんて情けないじゃないの！」

彼氏は一人でいいんじゃないの？　なんて反論できるはずもなく。

「とにかく！　その可愛さで男を捕まえてきなさい！」

理不尽だ、すでに関連性が見えない。

「出来るわけないでしょ……」

「けど好きな人いるんでしょ」

疑問形じゃない、断定だ。

「お婆さんから聞いたもん」

とどめの一撃。

「うっ……い、いるけどそんなのどうでもいいじゃん！」

私は顔に血が昇っていくのを感じた。

「も～う、初々しいんだから！」

愛里は短い手で私の顔を叩いた。

私はなんか馬鹿にされてるみたいで非常に腹が立った。

「彼氏なんか一生作るか～！」

私は人形の山の中に愛里を投げ込んだ。

「きゃぁ！」

私はそのままベッドにもぐりこんだ。私に恋愛は必要ない、いまさら恋愛なんて……。

私はそう思いながら眠りに落ちた。

誕生日

この日はまた一段と寒かった。道にある木々は全ての葉を落とし、木枯らしがそれを巻き上げていた。
秋がだんだん過ぎていき、私はいつも布団の中から抜けだせず、愛里に叩きだされて学校へ行った。

く～……眠い。愛里だって同い年なんだからこの気持ちわかるでしょ？

私はフワァとあくびをする。
教室はにぎやかで、置いてけぼりをくらわされたような気がする。愛沢さんも相変わらず孤立していて、千春はよく話しかけてくれた。彼氏なんて出来ないし、作りたくもない。
でも、そろそろ行動を起こさないとね。いつまでたっても帰れない。

愛里として潜伏してからもう二週間がたち、これといった収穫のないまま時間だけがすぎていた。
クラスの人たちと少しずつ話すようにもなって、思い出したことがあった。
昔の、明るかったころの自分。
まだ私は小学生で、友達がたくさんいて、毎日、日が暮れるまで遊んでいた。
いじめられていたころの私とは正反対の自分。
だから、愛里になっても違和感がなかったんだ。今の愛里は、昔の深雪だった。
どうして自分の殻に閉じこもるようになったんだっけ……？
そう思った瞬間、頭がちくりと痛んだ。頭の奥の方が思い出すこ

とを拒絶しているように。
私はそれきり考えることを止めた。
思い出してはいけない。思い出しては、いけないんだ。

うだうだと考えた挙句、私はもう一度自分の墓に行くことにした。
“自分の”といえる辺りに深雪がすでに死んでいることを実感した。
不思議なほど、私はそれを受け止めている。
私はそんなことを思いながら花を片手に墓地への道を歩いた。

あれ？

私は墓地に入って数歩の所で足を止めた。
私の墓の前に誰かいる。かかんで、そう、拝んでる。それにあれはうちの制服のような……。
私は気になってそっと近づく。その時、かがんでいた人影が立ち上がった。

彼は、まっすぐ私を見る。

「……お前、ここで何してる？」

早川君だった。
鋭い目、鋭い口調。無愛想な顔がいつもより怖い。間違いなく私を睨んでいる。
私の無防備な心臓は不意打ちを受けてばくばくとうるさい。

なんでいるの？　なんで？　なんで？
ちょっと、私見られてる……いやだよ〜

「お、お墓参り」

私はやっと声を振り絞って返事をする。

顔が火照るのを必死で隠す。

「あっそ。それと、神崎のこと嗅ぎまわんのは止めろ」

早川君は有無を言わさぬ声で言い捨てると、私の隣を早足で通り抜けて行った。

早川君が通り過ぎると私は全身で息を吐いた。緊張がゆっくり解けていく。

私はとぼとぼと墓の前まで歩いた。墓には真新しい花が生けてあった。

早川君、お墓参りしてくれたんだ……なんか嬉しいな。

自然と頬が緩む。笑いたいのを我慢して花を供え、合掌をする。目を瞑ったまま、私は早川君の言葉を思い出した。

神崎のことを嗅ぎ回るな、か。そんなこと言われたって私は見つけなきゃ帰れないんだよ……。

私はそっと目を開けて墓石を見つめた。

そしてさっきの胸の高鳴りを含む正直な反応を思い返す。

はぁ……死んでも、まだ早川君のこと好きなんだ。

愛里に何の反論もできない証拠がこの心臓だ。

「ほんとに……どうしよっかな」

「あれ？　愛里ちゃん？」

私は飛び上がらんばかりに驚いた。ここは墓地だ。幽霊が出ておかしくない。

私は心臓をなだめてから、ゆっくり振り向く。

「ち、千春？」

千春も驚いた顔をして私を見ている。

「こんなところでどうしたの？　お墓参り？」

「う、うん。おばあちゃんのお墓参りと……神崎さんのも」

私は視線を墓に戻す。

「深雪の？」

「うん、偶然見つけたから……」

「愛里ちゃんって深雪と知り合いだったの？」

思わぬ関係を指摘されて心臓が暴れだした。

今日の心臓は実に忙しい。

同一人物だと気付かれたらどうしよう！

「えっと、その……メル友？」

とっさに思い浮かんだものをそのまま口に出す。

「へ～そうだったんだ。もうちょっと早く言ってくれればよかったのに」

な、なんとかなった～。

嘘をついた罪悪感が少しあるが、私はほっと胸を撫で下ろした。

「あのね、こないだの買い物で買ったプレゼントね。深雪のなんだ」

千春は墓の前まで近づき、かばんから袋を出した。

私はしばし絶句する。

あれは私にだったの！？

「今日深雪の誕生日だったんだ」

千春はふと遠い目をした。

そして今日は私の誕生日だったの！？

「……そ、そうなんだ」

私はさすがに動揺を隠しきれない。家では両親ともに忙しく、誕生日を祝う習慣が薄かったため、無頓着だったのだ。

千春は袋をあけ、ブレスレットを取り出す。

「深雪、お誕生日おめでとう。このブレスレット、愛里ちゃんと一緒に選んだんだよ……」

千春は墓石の前にそっとブレスレットを置いて合掌した。

ありがとう、千春……勝手に死んでごめんね。

「約束、守ってるよ。これからもずっと守るから」

約束？　私と、千春の？

「見ててね」

千春はそっとそう言い残すとゆっくり立ち上がって私の方に振り返った。

「愛里ちゃん、帰ろっか」

「う、うん」

帰り道、千春は私のことを話してくれた。

小学校の時のけんかの話や、よく遊びにいった場所の話。受験勉強に、修学旅行……。

どれも懐かしく、楽しい思い出ばかりで、悲しい過去も泣き言も言わなかった。

私は、こうやって思い出になっていくのかな……あの記憶も、みんなから消えればいいのに。そうすれば、わたしは楽しい思い出だけに生きられる。

そうなれば、いいのに……。

文化委員？

私の誕生日をすぎた頃から、徐々に寒さが厳しくなって、私は愛里でいることになんの違和感もなくなっていた。

もしかしたら、自分は愛里だったのかもしれない。人形の愛里がいなかったら本気でそう思っていた。死んだ人間が生き返る世界なら、それもありなのかもしれない。

この世は全てでたらめで、神崎深雪は、もうすぐ消えてしまう……。

「秋宮、秋宮…あ、き、み、や」

「は……はい！」

私は驚いて顔をあげる。

そこは教室で、目の前には担任の先生。そして私を見る女子たちの冷たい目。どうやらまた寝ていたらしい。最近どれだけ寝ても眠くて仕方がない。

「お前、文化委員だからな。早川と討論会の準備にあたれよ」

担任は呆れた顔で黒板の文字を指差した。

黒板には『討論会、現代社会の生と死。自殺は罪かどうか』と書いてあった。

「は、はい」

なんとか返事をしたが、頭の中は自殺という文字に埋め尽くされていた。

な、なんでこれを討論するの？　去年は幸せについてだったのに！

「当日の準備とかが主だからそんな難しくないぞ。そんな顔をするな」

先生は私の表情から勘違いしたのか優しく励ましてくれた。

「はい、頑張ります」

完全に私の負けだ。寝たのがいけなかった。しかもあの早川君とだよ……。

あぁ、こっち睨んでるよ～

あれ？　ちょっとまてよ。たしか文化委員って私の役じゃなかった？

私は今日一日、自殺と討論と早川君が頭の中をくるくる回り、授業を受けるどころか寝ることさえ出来なかった。

そして、しおしおになって帰ってきた私にラブリーうさちゃんこと愛里は容赦ない言葉を浴びせてきたのだった。

「何よ！　そんなことでうじうじしてるわけ？　いい？　これはチャンスよ！　深雪の記憶と早川君、両方手に入れるチャンスじゃない！　いっちゃいなさい深雪！　自分の可愛さに自信を持って～！」

可愛いって……自分で言う？　というか、私早川君が好きだって愛里に言ってないのに何で知ってるの？

「愛里。私にそんなことが出来ると思う？」

私はベッドに倒れこむ。

あぁ、このまま引きこもってしまいたい。学校なんか行きたくないよ～

だって、だって、あの早川君と文化委員だよ？　あの時も私のことすっごく睨んでたよ。はぁ、私そんな嫌われるようなことしたかな～

私は愛里の罵声を半分聞き流しながら心の中で頭を抱えた。

そもそも私、早川君と文化委員をしてたの？

そして私はいつの間にか寝てしまった。

翌日、私は早朝から内心頭を抱えていた。何とか登校したのは良いものの、私の目の前には早川君。　私が席についてすぐ、早川君が近づいてきて、それからずっと私を見ている。

睨んでいる。見下ろしている。

視線をそらしたくても怖くてできない。

なんで？　私なんかした？　やっぱ、私の墓のとこにいたのがまずかったのかなぁ。

いや、けど……ううん、思えば深雪の時も早川君はいつも私のことを睨んでた。

やっぱり、私のこと嫌いだったんだぁ。あぁぁぁ、本当に引きこもりたい、登校拒否したいよ～！

「秋宮」

「は、はい！」

突然呼ばれ、思わず声が裏返ってしまう。

「今日、昼休み文化委員の会議があるからこいよ」

早川君はたったそれだけ言うと自分の席に戻って行った。私は空気の抜けた風船のように机に突っ伏した。

もしかしてあれだけを言うためにずっと私を睨んでたの？　きっと蛇に睨まれた蛙の気持ちってあんな感じだろうな。

私はまだ遠い昼休みを思ってため息をついた。

早く来て欲しい時は遅くて、早く来て欲しくない時にかぎって速いのはなぜだろう。

私は教室の時計を睨む。

おかしい、さっきまでは三時間目だったはず、一体どんな魔法がかかったのか。丸一時間分の記憶がない。しかしそんなことに気を取られている時間は無い。

早く会議にいかなくちゃ！

文化委員の集まりを初め、ほとんどの会議はこの会議室でやる。広くも狭くも無い教室には長机と椅子が整列している。

私が会議室に入った時にはすでに早川君はいて、その他にも二人そこにいた。きっと同じ文化委員なんだろうけど、交友関係が非常に狭かった私にはそれが誰なのか分からなかった。

「あっ、愛里ちゃんだよね～。転校生の、噂は聞いてるよ。私は隣のクラスの菅友美（すがゆみ）、よろしくね！」

トーンの高い声で話しかけてきたのはショートカットのいかにもパワフルな女の子だった。

「別に自己紹介なんかいらないんじゃないんですか？」

その隣にいる男の子が面倒くさそうに口を開いた。

「自己紹介は大切よ？　社交的にいかなきゃ」

男の子は面倒だと書いてある顔でこちらを見ている。

「篠部（しのべゆう）裕」

非常に簡潔な自己紹介だ。

「よ、よろしく」

私は直感で篠部君と話すことは無いだろうなと思った。

「では、みんな集まったので、文化委員会議を始めまーす」

菅さんの一言で始まった会議は、私と菅さんの話し合いと化した……。

彼女によると、今年は学年全体で討論会をしたいらしい。去年は班ごとだったからかなり大規模なものとなる。それにあたっての参加の仕方なのだが。

「やっぱり討論なんだからみんなに意見を言って欲しいよね」

菅さんは先ほどから頬杖をついて黒板を睨んでいる。

「そうだよね……けどそんなに時間ないよ？」

「それが問題なのよ」

私は菅さんの横顔を見ながら記憶を掘り出していた。菅さん、隣のクラスだから話した事は無い。けどなんとなく知っている気がした。たぶん時々私のクラスに来てたのだろう。

「一人一人マイクを持ってもらう？」

「だめ、みんなが口々に自分の意見を言ったんじゃ収集がつかなくなる」

私の案は即刻菅さんが却下した。

「じゃぁどうする？」

「どうしよう」

半分心ここにあらずの会話が途絶えた。

教室に痛い沈黙が流れる。私はちらりと銅像となっている二人を見た。二人とも無表情で怖い。

「事前に全員の意見を紙に書いてもらう。それを討論会で読めばいい。途中で意見のある奴は前のマイクで言ってもらえ」

淡々とした口調で沈黙を切り裂いた救世主は早川君だった。

「ナイスアイディーア！」

菅さんがキラキラした目で早川君を見た。

「帰ってもいいか？」

と、冷たい目で言った早川君はすでに立ち上がっている。

「ど、どうぞ」

早川君の迫力勝ち。早川君は颯爽と教室から出て行った。あの意見も自分が帰りたいから考えたんだ。ある意味すごい。

さすが、文武両道で名高い早川君。

いくら生き返ったとはいえ凡人の私には理解できない次元を生きている。

「けど、真面目にやってくれるみたいで安心したな～」

「……なんで？」

菅さんの方に顔を向けると彼女は苦笑いを浮かべていた。

「神崎さんがいなくなったでしょ？　だから職務放棄するかなぁって思ってたの」

私がいなくなったから？　なんでそんなことで放棄しなくちゃいけない？　あの早川君が……？

私の顔に疑問符が出ていたのか、菅さんはクスッと笑うと少し声を落としてこう言った。

「役員選出の時、文化委員だけきまらなくてね。まぁ、彼が立候補したんだけど、その時に条件を出したのよ」

条件？

「もう一人の文化委員を神崎深雪にする。それを条件にしたの」

「な、なんで？」

なんで私を？？？？？

「さぁ、彼女のことが好きだったのか」

ないない。

「なんとなくなのか」

あ、それもありそう。

「争いをさけたのか」

争い？

「彼女大人しいから仕事を押し付けられると思ったのか」

それだよ。絶対ありえる。私は人身御供だ。

「まぁ、彼はそのことについて何も言わないし、噂に尾ひれがついて彼女大変だったみたい」

菅さんは記録を読み上げるように話した。私は役員選出の裏話にも驚いたけど他クラスの菅さんがそれを知っていることにも驚いた。た　しか役員選出の時って、私休んでたんじゃ……。

早川君、それを利用したんだ。策略家、天晴れ……と、いうことは、私がいじめられた原因の中にこれ入ってるんじゃ！

女の嫉妬の怖さは身にしみて知っている。

「けど実は今回の議題をだしたの彼なのよ」

「え？　この議題早川君が出したの？」

てっきり先生かと……。

「彼がじきじきに掛け合ったらしいよ。あっ、もう昼休みが終わっちゃう。今日はもうこれで終わりね！」

これにて第一回文化委員会議終了。

今日の収穫、大漁。

「で？　深雪、なんか作戦考えてるの？」

その日の夜、ベッドにもぐりこむなり愛里がそう聞いてきた。

「作戦ってなによ、作戦って……」

「早川凍太を彼氏にする作戦よ」

うつらうつらしながらそんなものもあったなぁと頭の隅で思った。

「もっと恋に力を注ぎなさいよ！　女の子はね、恋に生きるのよ！」

「私女の子じゃないし」

「あほか～！　そんな言い訳が通用すると思ってるの？　……わかった、そこまでいうなら仕方ない」

えっ？　何も言ってませんけど？

「この私が直々に早川君に告白してあげる」

「はっ？」

私は枕元のぬいぐるみをつかんで目の前にぶら下げた。

「暴力反対――！」

「なんでそうなるの？　愛里ぬいぐるみじゃない……怪しすぎるよ」

「そんなことない！　いい？　まず私が彼の前に落ちる。よれよれの可愛い私を見て彼は絶対私を拾う。そしてその時彼に深雪からのメッセージを伝えるの！　いいアイディアでしょ？　ねぇ、深雪？」

果たして私は愛里の言葉を最後まで聞くことが出来たのだろうか……。

波乱の幕開け　討論会

驚いたことに、討論会までの日にちは三日しかなかった。原因は深雪の後任がなかなか決まらなかったせいだ。何度かクラス会を開いたが女子の争いが繰り広げられただけだったらしい。

ついに先生が介入し愛里が指名されて現在に至る。

私たちは早々にアンケートをし、それをまとめ、会場の準備をした。早川君と篠部君は顔を出さず、クラスの数人が手伝いに来てくれた。感謝感謝。

「よしっ、後は明日討論するのみ！」

椅子が並べられた体育館を見回して、菅さんが満足気に言った。

そして翌日、波乱の討論会が行われたのだった……。

討論会は五、六時間目に体育館にて行われた。予鈴がなると人が集まり始めた。

私たちは舞台の上、生徒とは向かい合う形になる。わいわいがやがや、まさしくそういう状態だった。みんなこれから何が始まるのかわかってるのかと訊きたくなる。

私はそれを眺めながらため息をついた。

そもそも討論会というのは生徒の自主性を強くするために考えられたらしい。

でも、なんかちがうんだよね。なんというか、夜中にやってる討

論会のような熱気がないんだよね～。

紙に書かれた字はどうでもよさそうに横たわっている。

私は事前に配っておいたアンケートの結果に目を通しながらそう思った。

内容が内容なのは認めるけど、一応自殺者を出した学年だしもっと意識が高いと期待していた自分がいた。

みんな、私のことなんか忘れたのかな……。

私は隣に座っている早川君を盗み見た。いつもの無表情でどことなしに体育間全体を眺めていた。

早川君も討論会に興味ないんだろうなぁ。題だけだして後は放置だもんね。

私はなげやりなため息を一緒に紙束を机に置いた。頬杖をついて体育館を見渡した。

誰も同じ学年に死にたいと思って苦しんだ人がいるなんて考えたことなかったんだろうな。

だれも、気付いてくれなかったんだもん……。

やさぐれてきた私の視界に何か黄色い物が入った。気になって見てみるとそれは早川君の机に置かれた封筒だった。

早川君のかな、薄い封筒……紙でも入ってるんだろうか。

「なんだ？」

じっと封筒を見ていた私に気付いたのか早川君がそう訊いた。

「その封筒何かなって」

ごまかす必要もなかったので素直に質問した。

「お前には関係ないだろ」

即座に早川君はそう言い返してきた。

はい、そういうと思った。半分なげやりになっていた私はハハッと乾いた笑みを浮かべた。

「そうだね」

自分でもいやになるくらい皮肉めいた声がでた。

嫌な女だなぁ。そう思っても投げやりな気持ちは収まらない。

その時本鈴が鳴った。なんかチャイムさえなげやりに聞こえた。

「ではこれから討論会を始めます」

菅さんの一言で話し声がおさまり始めた。

「今回の題は現代社会の生と死。自殺は罪かどうかです。まず事前に集計したアンケートの結果を読み上げます。その後、意見がある人は前のマイクまで出てきてください。では秋宮さんどうぞ」

私は、深く深呼吸してゆっくり目を開けた。

「アンケートの結果を報告します。まず、自殺についての意見を読んでいきます」

一呼吸置いて紙に目を落とした。

“自殺はいけないことだと思います。自殺者は命の大切さを知らないんだと思います”

“なんで死なないといけないのか自分にはわからない。もっと頑張ればよかったのに、残された側の気持ちも考えて欲しい”

“自殺反対”

ゆっくり読み上げていく。なるべく感情を出さないように。静かに、静かに。それでも声が震えてくるのがわかった。

“自殺を許すような社会だから自殺者が減らない”

“自殺をさせる人がいるからいけない”

“自殺者は自分のことを可哀想に思ってる勝手な人だと思う”

“自殺は、昔からあることだしそんなに騒ぐことでもないと思う。学生の自殺はただその人が弱かっただけなんじゃないか”

“やるならご勝手に、ただしどっか人目につかない所でひっそりと死んで欲しい”

「……以上が多かった意見です。これについて意見がある人は挙手をお願いします」

私はそこまで言い切るとほっと息をついた。　心を落ち着けないと泣いてしまいそう……。

体育館は少しざわついているが誰も挙手する人はいなかった。みんな似たような意見なのだろう。

「ないようなので次、篠部君お願いします」

「学生の自殺理由の大半はいじめが原因とされています。これについての意見を読み上げます」

“被害者が死ぬしかなかったことが可哀想”

“いじめが理由で死ぬなんでばかげている”

“こういうのがあんまり社会に出てこないことに問題があると思う”

私は淡々と読み上げていく篠部君を見ながらやる時はやるんだ、と勝手な感想を浮かべた。

いじめ。みんなが気付かないふりをしたいじめ。自分たちも加害者になってることにも気付かないで、知らないふりをした……。

“いじめられた側が自殺するなんで加害者に対するあてつけみたいでいや”

“そんなに思いつめる前にイヤだとはっきり言えばよかったのに。周りに助けを求める前に死ぬのはせっかちだ”

言えたら、いやって言えたら……誰も死のうなんて思わないよ。

“いじめなんて通過儀礼みたいなもんだし、受ける側もなんか問題あったんじゃないか”

“いじめは許せない。そのせいで死んでしまう人がいるってことはとても悲しい。私の周りでいじめがあったら私は止めたい”

嘘、気付かないふりをするくせに。

「以上です。何か意見ある人は挙手を……どうぞ、前へ」

手を挙げたのは私の知らない人だった。

「自殺はいじめだけが原因じゃないのにどうしてこの問いなんですか？」

「一番私たちに近い問題だと思ったからです。受験ノイローゼなんていわれてもピンとこないでしょ？」

「わかりました。それと、先ほどの意見にいじめで死ぬなんて馬鹿げているとあったけど、生きるも死ぬの個人の意思だし、部外者がどうこう言えるもんじゃないと思います。以上です」

突き放した言い方をする人だと思った。この人も、加害者だ。味方にはなってくれない。

「ありがとうございました。席に戻ってください……どうぞ、前に座ってる方、前へ」

「私は、いじめとかよくわからないけど、死ぬほどつらいものなら、なくさないといけないと思います。いじめられている人は勇気を出して友達に話してみるのがいいと思います」

勇気……言うのは簡単なんだけどな。

私はふっと笑った。知らない、みんなは何も知らない。

手を挙げた人は二三人いたけど皆大体似たような事を言った。時間は刻々と過ぎ、とうとう最後の議題になった。

「では最後に早川君どうぞ」

「最後は、自殺は罪かどうか……」

“自殺は罪じゃない、自殺した人は被害者だと思う”

“自殺は人殺しなんだから罪だと思う”

“罪は加害者と止められなかった人たちにあると思う”

“罪だとおもうけど、加害者や周りの人に罰を与えてたらきりがないと思う。それに自殺するかどうかは本人が決めたんだから本人に責任があると思う”

早川君の意見じゃない。わかっていてもつらい。早川君の声が、頭の中で響く。そしてそれは嫌な記憶を引っ張ってきた。

『神崎さん、今日は泣かないの～？』

周りからけらけらと笑い声が上がる。

『もしかして聞こえてないとか？　あははっそれってサイコー！何言ってもわからないんだよね～』

私はなるべく体を小さくする。必死に違うことを考える。聞いちゃいけない、何も聞こえない。そう自分に言い聞かせる。

『ねぇ、役立たずでいつも暗い深雪にいい名前を考えたんだ』

ハスキーな声は愛沢さんだ。冷たい目で私を見下ろしてる。

『え～何々？』

周りの女子が盛り上げる。

『死神、どう？　ぴったりでしょ』

『きゃー、どうしよう。命取られちゃう！　みんな、神崎さんに近寄っちゃだめよ！　彼女死神なの！』

女子の一人がそう叫ぶとクラス全体に伝わったも同然だ。私はじっと机の木目を見ている。

いつになったら終わるんだろう。

どれだけ我慢すればいいんだろう。

答えのわからない問いが頭の中をくるくる回る。

どうすれば終わるのかな。早く、早く楽になりたい……。

私の記憶はそこで途切れた。

胸の辺りがきりきりと痛む。

どうして今頃出て来るの？　もう、忘れたいのに、無かったことに……。

「以上」

どうやら早川君が言い終えたらしい。

だめだな、早川君の横顔がにじんできた。

私は必死に深呼吸をした。大丈夫。大丈夫。

「どうぞ前へ」

「自殺は罪です。さっきの意見にもあったけど残された人のことも考えて欲しい。命を捨てたことの罪じゃなくて、周りの人を裏切った罪があると思います」

「じゃぁ周りから期待も何もされてない人間なら死んでもいいんだな」

どこからか野次が飛んだ。

「そういうつもりじゃないけど」

「やっぱりさぁ、自殺を失くすには互いに理解しあわないといけないよ」

「自殺者がおかしいんだ」

体育館のあちらこちらから声が飛んだ。

「ちょっとみなさん、マイクの存在が……」

菅さんが静かにさせようとするが皆の声で消されてしまった。

違う。おかしいのはみんなだ。誰も……。

悲しいのか、悔しいのか、わからない感情がこみ上げてきた。もう我慢できない。

「いいかげんにして！」

私はマイクを持って立ち上がった。全員の顔が私に向いていて、やけに体育館が静かだなとどこか冷静に思う自分がいた。

「何もわかってないくせに知った風なことを言わないでよ。みんなは自殺した人の気持ちを全然考えてない！　自殺が罪かどうか？　そんなこと関係ないの」

「秋宮さん……？」

菅さんが私の名前を呼んだ気がした。けど私は秋宮じゃない。神崎だ。

「ずっと苦しんで、考えて、最後の答えがそれなのに、それすら否定するの？　みんなは何もわかってない。わかろうともしない。みんな気付かないふりして、それがどれだけあの子を、私を苦しめたか……。自殺なんてすぐにできるわけじゃない。何回も迷って、止めて……。自殺者にとって自殺は生きるか死ぬかじゃない。苦しみ続けるか、全てが終わるかどっちかなのよ！」

私はそうまくし立てた。ずっと言えなかった言葉があふれだした。

「そんなのただの被害妄想だ！　自殺して、現実から逃げただけじゃないか！」

どこからかそういう言葉が投げられた。私は声がした方を向いた。

「逃げちゃだめなの？　追い詰められて、追い詰められて……生きる意味も失くして、みんな敵。それでも頑張ったのに……最後に逃げただけで悪く言われる。彼女は自殺して安心したよ」

私の脳裏にあの日のことが思い出された。あの時は解放されることへの喜びを感じた。それは確かだ。

「もう苦しまなくてすむって、笑って彼女は死んだ。もう苦しまなくてすむ……よかったって。彼女はそう言った。それでも、自殺は罪なの？　彼女たちの最後の希望まで奪うの？」

「全部勝手にやったことじゃない！　誰にも言わずに苦しまれても困るし。いやなら言えばよかったのよ」

この声は知ってる。たぶん同じクラス、私をいじめた人たちの一人。

「いやって言えたらだれも自殺なんてしない！　だれも助けてくれない。友達だと思ってた人も、先生も誰も助けてくれない。彼女の絶望がわかる？　それでも彼女は頑張った……」

私は頑張ったのに……。

私は言いためていたことを言ったおかげでだいぶ落ち着いてきた。そしてそのぶん悲しみがあふれてきた。
こんなに訴えても、きっと彼女たちには届かない。誰も……。
「秋宮、お前の言いたいことはよくわかった。もう十分だ……座れ」
早川君が私の腕を掴んで引っ張った。早川君の声はいつもの何倍も優しく聞こえた。
私は静かに椅子に座った。だいぶ冷静さが戻ってくるととんでもないことをしたなと後悔に襲われた。
私ったら何やってるのよ！　どうしよ～正体とかばれたりしないよね。
そうよ、だってこれは彼女のことであって……うん。深雪、私の言葉を言ってやったよ！
でも……あぁ、目立ってしまったよ。明日からどうやって生きていこう。私どうしたらぁ？
「秋宮、落ち着け」
「……落ち着いてる」
小声で話しかけてきた早川君は呆れ顔で私を見ていた。
何？　なんでそんな顔してんの？
「その顔のどこが落ち着いてるだ。さっきから表情ころころ変えやがって気味悪い」

まさか、さっきの自問自答は全て顔にでていたの？

「ほ、ほっといてよ」

「では、これで討論会を終わります」

菅さんが終了の宣言をした。

えっ？　終わったの？　あれ？

皆ぞろぞろと退場していく、私はそれを見ながら首を傾げていた。

もうちょっと時間があったと思うんだけどな。

「なぁ……言っとくけどお前最後の二十分間ずっと百面相してたんだぞ」

見るに見かねてか早川君がそっとそう告げてくれた。

「うそ」

どうりで記憶がないわけだ。

「そうよ。飛んでくる質問全部無視しちゃって」

気付けば菅さんが私の後ろに立っていた。菅さんも呆れ顔だ。

「爆弾を投げるだけ投げて後は放心状態、いい加減にしてほしかったですね」

篠部君は階段を降りているところだ。

わざわざ嫌味を言わなくてもいいじゃない！

「ま、でも愛里ちゃんのおかげで充実した討論会になったことだし。いいんじゃない？」

そう？　いいのかな？　いいよね！

「ほら、そこ、早く教室に帰りな」

担任が私たちを手招きした。私たちは片付けもあるんだった。後片付けって準備よりも大変なんだよね……。

私はこの時、この討論会が全ての引き金になるなんて、思ってもいなかった。

届いた声

ホームルームが終わって放課後、クラブの人たちも手伝ってくれて比較的早く片付けは終わった。

「みんなお疲れ～」

菅さんはそう言い残して手を振って去って行った。これからクラブなんだろうなぁと元気あふれる背　中を見ながら思った。

そういえばなんで菅さん文化委員なんだろう。体育委員とかのほうが似合ってるのにな。

すでに体育館に討論会の名残はなく、クラブの人たちがネットを張ったりしていた。

私も帰らないと。

私は隅に置いておいた鞄を持って靴箱に移動した。

討論会も終わった。でも、私の記憶は全く戻らない。記憶の欠片も出てこない……。

溜息をついて靴箱を開けると、靴の上に紙が置いてあった。

嫌な予感が胸をよぎる。紙を手にとって見ると

やっぱりね。荒々しい文字が目に飛び込んできた。

“あんたってけっこううざいね。自分だけ正義の味方のつもりなの？　分かってないのは自分じゃん”

その一つ一つが胸に突き刺さった。

私の声は届かない。誰の心にも届かないんだ

知ってたことだけど、やっぱり辛い。

ねぇ愛里、愛里ならどうするの？　私は深雪だから、分からないよ。また、嵐が来るのかな……。

帰る気にもなれなくて、私は靴箱を閉めた。鞄を担ぎなおして階段を上がった。どこかで時間をつぶそっかな。

家に帰っても愛里がいるだけだし、今愛里に会ったら泣きそうだし……。

人形に慰められるのはなんか癪に障る。

そういえば、この学校にも屋上あったよね。なんでここで自殺しなかったんだっけ？

あっ、人が多かったのと高さが足りないからだったかな……。あれ？　なんだっけ？

４階建ての校舎の屋上はいい感じに風が吹いて、疲れた時はよくそこで休んでいた。まっさきにそこから飛び降りたはずだ。彼女たちへの見せつけにもなっただろうから。

階段をあがり、屋上のドアを開けると懐かしい景色が広がっていた。

「えっ？」

違ったのはそこに人がいたってこと。

「早川君？」

早川君という存在に驚き、そこに広がっている光景にもう一つ驚いた。

「ちょ、ちょっと何してんの？　危ないし、け、消さないと」

早川君が座っている前には火がぱちぱちと燃えていた。

「……さわぐな。これぐらいでこの校舎が燃えると思うのか？」

早川君は私の出現にも驚くことなく、手にしていた紙束を火の中に放り投げた。とたんに火が大きくなってそれを飲み込んだ。

私はおそるおそる火に近づいた。

「何燃やしてるの？」

「紙」

あっ、ですよね。

「凶器だから、燃やす」

「あ、手を切ったりするもんね」

そんな理由で燃やすのかなぁと思いながら私も火の側に座って火を眺めた。こうやって見るとけっこう火ってきれい。

「秋宮、その紙はなんだ？」

早川君の視線は私の右手に掴まれた紙に注がれていた。

「え？　これは……」

一瞬早川君の表情が険しくなった。

うわっ、私なんかまずいこと言った？

「燃やせ」

「え、あ、うん。そうだね」

私は丸めて火の中に放り込んだ。すぐに火がついて黒くなっていった。それを見ていると心が楽になった気がした。

「今日の討論会、お前の意見、俺は良かったと思う」

へ？

突然の早川君の言葉に私は目が点になった。どうしたの、早川君？

「俺もあいつらは何もわかってないと思う。自分たちが犯した罪にも気付かずに、生きている」

俺も含めて……。

とたんに早川君の言葉は今までの嫌な気持ちを洗い流してくれた。

「ありがとう。わかってくれて」

私の声、届いてた。すっごく嬉しい……言ってよかった。

「けどね、本当は全員じゃなかったんだ。読むことは出来なかったけど、二人……わかってくれてる人がいた」

私は二枚の紙を思い浮かべた。丸い、可愛い字と、神経質そうな堅い字の二つ。

「自殺者の苦しみを完全に理解することはできないけど、少しでも減らすことができたなら良かったって……私、すっごく嬉しかったんだ」

「その、お前さ……もしかして」

早川君が言いにくそうに目をそらした。単刀直入に物を言う早川君にしては珍しいことだ。

どうしたんだろう……はっ、まさか私が深雪だってばれた？

「そ、そんなわけないじゃん。あの時はちょっと頭に血が上っていろいろごっちゃに……」

私はそっと早川君の表情を見た。心苦しい言い訳だけど、ばれたくはない！

「そうか、ならいいんだ」
早川君は口元に笑みを浮かべた。
え、え、え！　早川君が笑ってる！
「お前に自殺は似合わない」
あれ？　深雪のことを勘付いたんじゃなかったの？
そしてそれと同時にその言葉をもう一度思い起こす。
「え？　それどういう……」
軽くそれ人をばかにしてません？
「別に、それとこれ、お前気にしてたよな」
早川君がポケットから取り出したのはあの封筒だった。
「あ……うん」
「今日、燃やそうと思って、討論会を見せた後」
それで焚き火してたんだ。少し納得。
早川君は封筒の中から何かを取り出して私に向けた。
「知ってるんだろ？」
手紙かと思ったらそれは写真だった。それも深雪（わたし）の。

「こ、これ……」

私は驚きのあまり次の言葉が出なかった。

なんで早川君が私の写真を？　しかもこれいつの？　記憶にない！

「神崎深雪」

早川君がその名を口にしたとたん心臓が飛び跳ねた。

「うん、知ってる」

私は強くうなずいて写真を早川君に返した。

「転校してきて最初に聞いたことが神崎のことだったからな……どういう関係か、聞いてもいいか？」

「私と深雪は昔の友達だったの、時々メールのやりとりをしてた」

早川君の質問の真意が分からなかったけど私は一応答えた。受け答えは千春に言ったことをそのまま使う。

「そうか……悪かったな、あんなこと言って。お前が興味本位で神崎のこと、調べてると思ったから」

あんなこととはたぶん墓地での一言だろう。

「ううん。いいよ」

私のこと守ってくれようとしたんだね。優しい早川君。
そして早川君はそれっきり黙ってしまった。
私はゆるやかに燃えている火を見ていて重要なことに気がついた。
「ねぇ、その写真燃やすって言ってなかった？」
「あぁ」
「彼女のこと、嫌いなの？」
その言葉を口にすると胸が痛んだけど、訊きたかった。
「違う」
その言葉に私はほっとした。死んだ後まで嫌われていたくない。
また沈黙が訪れる。早川君がまた紙束を入れた。それはすぐに燃えて火柱をあげた。
私は、全ての人に嫌われたわけじゃない。分かってくれる人はいるんだ。
そう思った時私は殴られたような衝撃を覚えた。
わ、私は、なんてことをしたんだろう。分かってくれる人はいたはずなのに……あの人たちの意見も今なら分かる。
あと少し待つことくらいできたはず。あと少し、声を大きくするくらいだって……。
なんで？　後悔しないって決めたのに。
正しいと思ってたのに……だめだよ。こんなの私のしたことは？
「お別れをするんだ」

ぐちゃぐちゃと思考が入り乱れている中を早川君の声が貫いた。
早川君の声には強い決意が込められていた。
「……もう、会えないのに？」
私を忘れてしまうの？
私はぐちゃぐちゃの塊を彼方へ押しやって、目の前のことに向きなおる。
「もう、会えないからだ。俺が欲しかったのは、一瞬の神崎じゃないんだ。永遠の神崎が欲しかった……」
私は早川君が言っている意味がよくわからなかった。永遠はない、それだけを思った。
「好きだったんだ。片思いいでおわったけどな」
早川君の言葉を3回くらい反復させ、それが爆発した時、私の頭は全ての機能を停止した。
「え？」
私はそれしか言葉を発せない。私の聞き間違いでないのならたしか早川君は好きと言った。
「ずっと、好きだった。入学してからずっと。彼女のことを見ていた」
早川君の視線は火に向けられていたけど、それを通して違うもの

を見ているように感じた。

うそ、全然知らなかった。え？

「な、なんで？」

「初めて見たときに綺麗だと思った。薄汚れた人の中で、彼女だけが、綺麗なままだった。それに、彼女は自分に正直に生きてた……それが、うらやましかった」

綺麗、とかそんなこと全然ないし、正直というより、不器用で周りに合わせられなかっただけだよ……。

「俺は、周りにも自分にも嘘をついて生きてきた。カラッポで、薄情な人間だ。何も出来ず、ただ見てるだけで……失った」

早川君は本当につらそうに話した。

「そんなこと、ないよ……」

私はそれを言うのが精一杯で、早川君の気持ちに耳を傾けた。

「お前の言葉を聞いて、自分の思い違いに気がついた。そうだよな、言えるわけないんだ。助けを求められるわけなかったんだ……」

早川君はくしゃりと前髪を掴んだ、その手は少し震えていた。

「笑顔が消えて苦しそうな顔になったのも見てた。いじめられていたのも知ってた。なのに俺は……何も出来なかった！　やめろって、言えばよかったんだ……今更、だけどな」

早川君は自嘲気味に笑った。早川君も苦しんでいる。自分を責めている。

「それだけで、十分だよ……嬉しい、そう思ってくれてるだけで深雪は喜んでる」

胸の奥が震えた。ごちゃまぜな感情が押し寄せてくる。

「だといいな……。なぁ、神崎は、死んで楽に慣れたのか？　死んで、安心したのか？」

「それは、わからない」

最初は、嬉しかった。でも……。

「もしそうなら、俺は喜んでやらないといけないんだろうな」

早川君は唇を強くかみ締めて、空を見上げた。

「でも俺は、生きて欲しかった。神崎が死を望んでいても俺は、生きて欲しかった。俺の声を、言葉を、聞いて欲しかった。受け入れてくれなくてもいいから……自分の気持ちを言いたかった」

私を真っ直ぐ見た早川君の目には涙が溢れていた。私はその時、本当の早川君に触れた気がした。

辛いのは、私だけじゃない……。

「俺は、最低だ。逃げてばかりでそのうち何が一番大切なのかも見失って……失くしてから気がついて」

早川君はそこで言葉をつまらせた。

「早川君……」

私は、悲しいのか、嬉しいのか、自然に涙が溢れてきた。

「秋宮？」

「ありがとう……ありがとう」

私はただそう繰り返す。良かった、還ってきてよかったって、初めて思えた。

「なんだよ、薄気味悪い」

早川君の不愉快そうな声が少しおかしかった。

「あのね……深雪は、早川君のこと、好きだったよ」

好きって言葉を口にしたとたん恥ずかしくて膝頭に顔をうずめた。

「……本当か？」

「うん、メールでそう言ってた。かっこよくて、憧れの人だって。どんなに辛くても、早川君が学校にいるから、頑張れるって……」

本当に、そう思ってた。好きで、でもこんな自分ではだめだと思ってたから、ずっと大切にしまっておいた気持ち。

「そうか」

早川君ははずかしそうに笑って、また空を見上げた。

「じゃぁ、俺は幸せだな。好きな人に好きになってもらえて」

「深雪も幸せだよ」

とっても、とっても幸せだよ。

「神崎は、ずっと俺の心の中にいるんだ。泣いたり笑ったり」

「うん、私の中にもいる。ずっと、これからもずっと……」

私たちはしばらく黙ったままだった。

二人の涙が乾いた頃にはもう火は消えていて、代わりに空が赤く染まっていた。

「ねぇ、もしよかったら、私がその写真もらってもいい？」

「俺も、お前に持っていてもらった方が、神崎も喜ぶと思う」

早川君から手渡された写真の中の私はさっきより笑っているように見えた。嬉しいんだ。

私はそれを上着のポケットにしまって立ち上がり、ゆっくり柵の方に歩いて景色を眺めた。

「なんか、久しぶりに空を見た気がする」

そして、今まで見て来た空の中で一番きれいに思える。

「いつからか、空なんか見上げなくなった」

「ほんと……ん？」

私は柵の端にある赤いものに気がついた。気になって近づいてみた。

それは制服の赤いスカーフだった。

「あぁ、それか」

「誰のかなぁ」

私はスカーフを手にとって見た。二つのスカーフが一緒に結ばれていた。

スカーフにはたいていイニシャルが書いてある。私はそれを探した。

――M・S――T・M？

なんかこの字見覚えがある……。M……S！

神崎深雪！　私の字だ。じゃぁこっちのは？

「……あっ」

スカーフの端に桜の花びらの刺繍があった。

これ……千春のだ。

「どうした？」

いつのまにか早川君が側に立っていた。

「えっ、い、いや」

「M・S……神崎深雪？」

するどっ！

私の心臓が飛び跳ねた。

「もう一人はわからないな」

「いや、でも深雪じゃないかもよ？」

私にこんなところにスカーフを巻きつけた覚えはないし。

「たしかにそうだよな」

そう呟いた早川君の顔は切なくて、私は遠い空に視線をそらした。

それから少し話をしたけど、私はあまり覚えていない。

「きゃ～！　何よそれ！　ありえないわ、この世の終わりよ～」

「何よその言い草」

家に帰ってすぐに愛里に話した結果がその言葉だった。

「だって、そんなねぇ」

愛里は人形ではあるが遠い目をして言葉を続けた。

「まじ彼が深雪のこと好きだったとは思わなかったわ」

あれほど人に告白がどうのと言って置きながら本音はそれか。

私は黒い笑みを浮かべた。

私の黒い気配を感じてか愛里が突然静かになった。

「おやすみ、愛里」

「お、おやすみなさい」

今日で分かったことがある。私は記憶がない。あのスカーフはなんなのか。

それがわかったら私は帰れるのかな。

帰る？　どこに？

届いた声（後書き）

ちょっと、長いかな。

読んでくれている人がいたら、ぜひ感想ください。

作者は心待ちにしています。では。

新たな助け

次の日、私は教室に入った時から違和感に気づいていた。人の目が違う、昨日までとは全く。

こんなことは初めてじゃない。これは予兆、これから始める戦いへの。

かかってくるのね、あの時と同じように。

だけど、もう負けない。私は一人じゃない、愛里と一緒、そして早川君も……私は負けない。

「おはよう」

私が席に座ってこれからの対策を練っていると、千春が声をかけてきた。

「あ、おはよう」

「私、昨日感動しちゃった。愛里ちゃんはすごいよ。人の気持ちがわかってる」

千春が口にした言葉に私はもう照れるしかなかった。この全員が敵のような環境でも私を理解してくる人はいるんだ。

「ありがとう」

「私も、人の気持ちが分かるようになりたいな、気づいてあげられ

るように」

千春の口調は最後になるにつれて悲しいものに変わっていった。

千春も、悔やんでいるんだ……。

「もう十分わかってるよ。大丈夫」

千春が気に病む必要はない。悪いのは私なんだから。

「ほんと？」

「うん」

わかってくれる人はいる。もしかしたら話せばわかるのかもしれない。理解しあえるのかもしれない。

だがそんな希望は次の休み時間に砕かれた。

「秋宮さん」

私は背後から誰かに声をかけられた。いやな声だ、何かを企んでる。

「なに？」

私が顔をそちらに向けると、良く知ったこと子が立っていた。前は愛沢さんとよく一緒にいた、そして私をいじめた人だ。

つい表情がきつくなってしまう。

「なに？　そんな怖い顔して、何か言いたいことでもあるの？　正

義の味方さん？」

こいつか、昨日の紙は。

「別に」

私はそっけなく返した。そう返すのが精いっぱいだった。怒りがこみ上げてくる。今まで我慢していたもの、それがこみ上げてくる。

「あんた、どういうつもりなの？」

そう言って、彼女はポケットから一枚の紙、いや写真をとり出した。

「それ、どこで！」

深雪が写っている写真で早川君にもらったもの。たしか上着のポケットに入れておいたはず。

私は急いで上着のポケットを探った。

ない、どうして？

「落ちてたわよ？」

違う、さっきの体育の時間に取ったんだ。

「わざわざ届けてくれんだ。ありがとね」

私はありったけの皮肉をこめてそう言ってやった。

「あんた、転校して来てからこいつのことずっと探ってたわね。何考えてんの？」

「あなたには関係ない」

「こいつのこと可哀想とか思ってんの？」

「あんたの方こそ関係ないって」

別の誰かが割り込んできた。それにつられて周りの女子が口々に悪口を言い始める。愛里への、深雪への。

「事故で死んだの、このつまんない人間は。そんなやつを嗅ぎまわってどうすんの？」

そう言って彼女は甲高い声で笑った。

違う、事故で死んでなんかいない。私は自分で死んだんだ。

「あ、もしかしてあれ？そいついじめられてたからそれが原因とか思ってんの？」

別の方向から声が飛んでくる。容赦のない、悪意に満ちた声。愛里と深雪への。

「は？　あんなのゲームじゃん」

「そうそう、暇つぶしだよね～」

「あの子も嫌がらなかったし」

四方八方から声が飛んでくる。

違う、違う違う！　言わなきゃ、声を出さなきゃ。

なのに、どうして？声がでない

私の体は心とは裏腹に動かなかった。

このままじゃ前と同じじゃない。だめ、声が、息が、苦しい……

押しつぶされる。

逃げたい……。

「いいかげんにしなさいよ！」

「いいかげんにしろ！」

突然二つの声がわりこんだ。

まったく質の違う、高い声と低い声、剣と盾。そして嫌いな声と好きな声。

その声でざわめきが収まり、皆が驚いた顔でその二人を見た。だが一番驚いているのはその二人だった。互いの顔を無言で見合っている。

愛沢さんと早川君。

「何よ、二人して大声だして」

彼女は強い口調でそう言った。だがその目には動揺が写っていた。

二人は同時にこちらを見た。その目はぞっとするほどの冷たさを

感じさせた。

「お前、人のもん取っといて勝手なことぬかすな」

先に口を開いたのは早川君だった。その声は今まで聞いたことのないほど怒気を含んでいて、低かった。

「な、なによ。落ちてたって言ったでしょ」

「それでもそれはその子の。拾ったのならさっさと返したら？」

それに引きかえ、愛沢さんの声はどこまでも冷たく、突き刺さる。

「そんなに言われなくてもこんな写真返すわよ」

彼女は私を睨んで、机の上に写真をほうり置いた。

「つーか、なんで二人が口出ししてくんの？」

「そーよ、特に沙那。あなたあの子を一緒になっていじめてたじゃない」

教室のあちこちから二人に対する反論が出てきた。

「別に理由なんてない。俺が止めたいから止めるだけだ」

「なにそれ。この子に気があるの？」

「ない」

間髪いれずに返答した早川君に私は呆気にとられた。

そんなに即答しなくても……いや、これは愛里のかわいさに翻弄されない早川君を讃えるべき？

「あんたたちはいつまでもそこにいればいいわ。最低な人間に。話すことなんてない」

愛沢さんはそう言い捨てると私に近づいて腕を掴み無理やり立たせた。

「え？」

「あんたも、なんで黙ってるの？　悔しかったら言い返しなよ」

私は愛沢さんにそう言われ、唾を飲み込んだ。

言い返す？　私が？

そうだ。言い返さないと……私は、そうしたはずよ。

「……うるさい」

私は声を振り絞る。届け、私の声。この思い。

「は？」

「深雪が死んだのはあなたたちのせいよ！　ゲーム？　あれが？　これも？」

「そうよ。ていうか、あの子事故死でしょ」
「そんなのわからない。誰にもわかりはしない！」
そう叫ぶとふいにめまいに襲われた。
まずい、久しぶりに大声だしたから酸素が……。
「そう、誰にもわかりはしないわ。あの子の心も」
愛沢さんはそう捨て吐くと私の腕を掴んだまま歩きだした。
「え？　あの、え？」
そしてその前を早川君が行く。
あの、もしもし？
ドアを開け、騒然とする教室を抜けて、ただ引かれるままに歩いた。事態が把握できていない私を気にすることもなく、愛沢さんは階段を上っていく。
私をいじめてたのに。なんで私を助けるの？
階段を上った先、そこは屋上だ。
そして私はそこで、新たな苦悩と闘っていた。
果てしない沈黙、二人ともここに来てから一言も話さない。そんな二人に囲まれている私はなんともいえぬ重圧をその身に受けていた。

あぁ、空気が重い。

「……あ、あの。ありがとう。助けてくれて」

やっとの思いで口にしたお礼の言葉はすぐさま次の言葉であっさり切り捨てられた。

「別に」

二人の息の揃った返答。とりつく島もない。

「俺は、もう同じ過ちを犯したくなかったんだ」

「過ちね」

早川君の言葉に愛沢さんが自嘲気味につぶやいた。

「償いを、したかったんだ。あの時止められなかったから」

「償いきれないこともあるわ。私のように」

抽象的で、独り言のような内容だけど、言いたいことは伝わった。

「だけど、後悔してる。償おうとしてるんでしょ？」

どうしてだろう。今は愛沢さんと普通に話せる。

助けてくれたから？　それとも……。

愛沢さんが顔を私の方に向けた。自然と目が合う。

大丈夫、怖くない。たぶん、私の気持ちが変わったんだ。

「後悔したって、なんにもならないじゃない。後悔しても、深雪は戻ってこない。私の罪は一生消えない」

罪……どうしてだろう。

前はあんなに愛沢さんが憎かったのに、罪悪感に苦しめばいいって思ってたのに、今はそう思えない。

「罪は、私にもあるよ……」

それは、自分にも罪があることに気がついたから。

こんなにも人を苦しめた罪。人を信じられなかった罪。

私は被害者じゃない、加害者だ。

「一度ぐらい、生き返ってくれないかな」

早川君が苦笑交じりにそう言った。

ここにいるよ。私は生き返ったの。

伝えたい、でも……シュワシュワ、ポンって消えちゃうんだよね。

「生き返っても、また別れなくてはいけなくなるんなら。生き返ってほしくはないわ」

うん、そうだ。私は戻らなくてはいけない。記憶が戻ったら、戻るんだ。あそこに。

「ねぇ、あの子の家に行ってみようか」

愛沢さんがふと思いついたようにそう言った。

「え？」

私は顔をあげて愛沢さんの顔を見た。愛沢さんの顔は本気だ。

「いいかもな。俺もいく」

「わ、わたしも」

私は早川君につられてそう返事をしていた。そして言った後にその意味を理解した。

え？　家？　私の家〜？

「じゃぁ放課後。校門前で」

そう愛沢さんが締めくくってこの場はお開きとなり、私たちは仲良く先生のお説教を受けた。

ただいま私の家

そして放課後、校門前で私たちは集合した。
お世辞にも愛想がよいとはいえない二人に囲まれ、私は必死にその場をつなごうとしたが挫折した。周りの視線も痛い。
そうして私たちは一言もしゃべることなく私の家へと向かったのだ。
久し振りにみる我が家は冷たく。私は緊張していた。

「あなた、大丈夫？」

見るに見かねてか愛沢さんが声をかけてきた。

「……き、緊張する」

「まぁ、な」

珍しく、早川君の同意があった。先ほどから彼がしゃべらなかったのは緊張していたからかもしれない。
恋人の家を訪ねる気分なのかな……。って恋人私じゃん！　や、どうしよう、自分で言ってて恥ずかしくなってきた。
動揺する私の耳になじみあるメロディーが届いた。愛沢さんがチャイムを押したのだ。

「ちょ、まだ心の準備が」

血圧上昇により顔が火照っている私と反対に愛沢さんは涼しい顔をしていた。

「はい」

「愛沢です。友達と遊びに来ました」

「あぁ……今開けるよ」

応答に出た声はお兄ちゃんのものだった。でも私の知っている声とは違う、固く、低い声だった。ほどなく扉があき、出迎えてくれたのはやはりお兄ちゃんだった。

“お兄ちゃん”

うっかり言葉にしそうになって、あわてて引っ込める。

「今日は深雪の友達も一緒なんだね。あがって、深雪も喜ぶよ」

お兄ちゃんの案内で通された私の部屋は以前と変わらず、そのままだった。

「何も、変わってない」

自分が今までここにいたような錯覚を起こしそうになった。

「来たことがあるのか？」

「い、一度だけね」

そうか、と短くつぶやいた早川君の顔には悔しさがにじみ出ていた。

もっと早くこの気持ちに気付けたら、もっと早く声をかけたら…
それは私も同じ。私は死んで、結局後悔だけが残った。
私はベッドに座った。少し硬めのマットも可愛さのない無地の布団も、すべてが深雪だった。
「愛沢さんはよく来てるの？」
私は本棚を眺めている愛沢さんに声をかけた。
彼女は本の背表紙を眺めたまま言葉を返す。
「そうよ」
そっけない返事だが今は暖かく聞こえる。
もしかしたら私は、愛沢さんの優しさに気づいてあげられなかったのかもしれない……。
ふと視線をあげると、窓辺に飾られている写真立てが目に入った。
「写真立て……？」
思わず漏らしたその言葉に早川君は怪訝そうな顔をして私の視線の先に歩いて行った。
「なにか覚えでもあるのか？」
早川君は写真立てを手にとって、ほこりを払った。
「……ないけど」
ないから問題なのだ。私の記憶ではそこにそんなものを置いた記

憶はない。だがあの埃を見るに長い間放置されていたらしい。
早川君はそれを持って私の隣に座った。正直な心臓が高鳴る。
「……小さい頃の神崎の写真か？」
私が覗きこんで見ると、そこには二人の女の子がいた。
髪の短い子と長い子、顔の細かい部分は写真の劣化が進んでいてわからない。
「たぶん髪の長い方が深雪ね」
「だろうな」
「何それ？」
私たちの会話に興味を持ったのか愛沢さんが寄ってきた。
「深雪の小さい頃の写真。髪の長い方が深雪だと思うんだけど」
写真を見た瞬間、愛沢さんは顔をこわばらせた。だが一泊後には目を細めて微笑を浮かべた。嬉しくも、悲しくも見える複雑な笑み。
私は初めて見る愛沢さんの表情に驚きを隠せなかった。早川君も軽く瞠目している。
「違うわ。髪の短い方が深雪よ」
彼女の声は今までで一番柔らかかった。
「え、なんで？」

反射的に聞き返したがそう言われれば昔は髪が短かったような気もしてきた。

「だって、その隣に写ってるのは私だもの」

間三拍。

「うそぉぉぉ！」

愛里としての驚きに深雪としての驚きも加えられなんとも素っ頓狂な声をあげてしまった。

「お前ら、そんな昔からつきあいがあったのか？」

ないないない！

私は心の中で必死に首を振る。

「まあね。深雪は覚えてなかったみたいだけど」

お、覚えてない……。

愛沢さんは早川君から写真立てを受け取ると向かいにある勉強机のイスに腰をおろした。

「あの時、私の姓はまだ桜井でずっと家にこもってる女の子だったしね。分からなくても無理ないわ」

彼女の口から出て言葉はおよそ今の彼女からは想像もつかないものだった。

「両親も不和でね。毎日家にいるのが嫌で図書館ばかり行ってたの。そこでね、深雪にあったのよ……」

夏が近づき、気温は日に日に高くなっていく。気の早いせみは既に鳴き始め、短い生涯を謳歌している。空は色を濃くし、雲も厚く、大きくなった。

迷いなどない空、それを見上げる度、沙那は陰鬱とした気分になった。

家には昼夜を問わず喧嘩をする両親がいて、父親が働きに出ても、母親は沙那にかまってなどくれなかった。

そのせいか、沙那小さい頃からよく本を読んだ。本の中には幸せがたくさんあった。

この日も、沙那は癒しと涼を求めて図書館に向かった。

図書館はいつも静かで落ち着いた。そこには幸せがたくさんあった。

沙那がいつもの席で絵本を広げていると、正面の席に誰かが座る気配がした。沙那は気にもせずに読み続ける。

「ねぇ、あなたいつもここにいるよね」

あまりにも突然すぎて沙那はその言葉が自分にかけられたものだと気付くのに時間がかかった。

「わたしもそれ読んだんだ。おもしろいよね」

顔をあげるとショートヘアーの小麦色の肌をした女の子がいた。

……なんでまだ夏じゃないのに焼けてるんだろう。

第一印象はそれであった。

「私けっこうその話好き。お姫様が出てくる話ってワクワクしない？」

女の子は沙那の反応なんか気にせず一方的に話し続ける。

「お姫様っていえばさぁ……」

「ちょ、ちょっと。あなた誰？」

やっとのことで沙那は言葉を振り絞った。止めなければ話がどんどん進む。

「え、私？深雪。神崎深雪だよ」

「深雪……」

やはり初めて会う人のようだ。記憶にそんな名の知りあいはいない。

「あなたは？」

「……桜…い……」

緊張のあまり声が消え入りそうなほど細い。

「さくら？へ～さくらちゃんか、可愛い名前だね」

「え、ちが……」

沙那が訂正しようとした時にはもう深雪は本に目が行っており、とうてい話を聞いてくれるような様子ではなかった。

沙那は諦めて再び視線を本に落とした。

沙那が一冊を読み終え、立ち上がりざまに深雪の様子を窺ってみるとなんと彼女は寝ていた。

……何しにここにきてるのかしら。

沙那は深雪を横目に本の貸し出し手続きをして図書館を後にした。

もう昼時だ。さすがに昼には一度家に戻らないとまずい。やつあたりされるのはごめんだった。

団地が立ち並ぶ息が詰まるような住宅地。団地と団地の間には必ず公園があって、帰るにはそこを通らなくてはいけなかった。

休日ともあって、子供たちが元気に遊んでいる。沙那と同じ年の頃の子供もたくさんいた。

沙那は彼らをなんとなげに気にしながら団地へ入って行った。

ボタンを押してエレベーターを待つ。

楽しそうな遊びの輪に、沙那は昔から入ろうとしなかった。

幼稚園でやった家族ごっこも面白くなかった。彼女は母親の演じ方が分からず、娘の演じ方もわからなかったのだ。

エレベーターの扉が開き、沙那は乗り込んだ。
自分の階を押して上のランプを見上げる、一定の間隔で進んでいき、止まる。
そして扉が開くと沙那は重い足を踏み出した。

家の中に入ると空気は冷たかった。物音もない。台所のテーブルの上にはお好み焼きが置かれていた。それを電子レンジで温めて食べた。
母親は寝ているのだろう。
沙那は食べ終わった食器を片づけて居間で本を広げた。自然と今日会った女の子のことが思い出される。

あの子……いつも来てたのかしら。

全く記憶にないが相手は自分のことを知っていた。これまでも何度か正面に座っていたのかもしれない。

誰かと口を利いたの久しぶりかも……。

そして次の週の休日も図書館に行くと深雪がいた。
彼女は沙那に気がつくと本を脇に置いて笑顔で歩み寄ってきた。
「さくらちゃんだ〜。おはよう！　こないだはいつの間にか寝ててさぁ、目が覚めたらもうさくらちゃん帰っててびっくりした」
そして桜ちゃんで定着していた。
「おはよう……」

「図書館って静かだからつい眠くなるの」
あははと笑いながら深雪は沙那の手を掴んだ。
「ひゃぁ！」
突然のことに沙那は変な声を出してしまった。
周りの利用者の視線が痛い。
「ねぇ、今日の午後から暇？　遊ばない？」
「え……え？」
遊ぶって何？
「今日いい天気だし。公園で遊ぼうよ」
え、もしかして私、誘われてるの？
遊べる？　みんなと同じように……？
「……うん。いいわよ」
沙那は極力いつもと同じ口調で言った。
だけど嬉しくて顔が自然と笑顔になる。
「やったぁ！」
「ちょ、静かにして」

大声を出した深雪を慌てて沙那は落ち着かせる。
深雪は満面の笑みで沙那の後ろをついてきていた。
同じ本棚に目をやって、好きな本を取っていく。いつもと同じ動作なのに、隣に人がいるだけでなんだかわくわくした。

……変な子。

沙那は胸の辺りがくすぐったいのを我慢しながら必死に背表紙を目で追っていた。
昼ごはんを家で済ませ、テレビを見ている母親の背中を一瞥してから家を出る。
娘が何時何処に行こうが関係ないのだろう。

「さくらちゃ～ん」

外に出ると、前の公園に深雪はいた。
そして沙那を引っ張って他の子供たちがいる方へと歩いて行く。

「え、ちょっと待ってよ。何するの？」

「え～？　わかんないよそんなの」

行ってからのお楽しみ、と深雪は付け加えた。
遊んでいる子供たちが二人に気がついて視線を上げた。

「あ、深雪ちゃんだ」

「深雪ちゃんの友達？」

「そうだよ～。さくらちゃんっていうの。一緒に遊んでもいい？」

深雪はこの子供たちとよく遊んでいるらしく、すんなりと輪の中に入って行った。
しかし沙那はどう話しかければいいのか分からず、輪の外でうじうじと深雪の背中を見ていた。

「さくらちゃん？　あ、向いのマンションの子だ」

「ほんとだ～さくらちゃんっていうんだね」

深雪に紹介された沙那の下に子供たちが集まってくる。
沙那は小学校でもこんな多くの友達に囲まれたことがなかったので、一気に緊張してしまう。

「よ、よろしく」

「ね～ね～。何してたの？」

深雪は沙那の緊張など吹き飛ばすほどの明るさで女の子たちに訊いた。

「おままごと。だけど人数も増えたからおにごっこしよっかな」

「おにごっこやる！」

深雪が万歳をしておにごっこに賛成すると、他の女の子たちも乗ってきた。

「じゃぁ、おに決めるよ！　じゃんけんぽん！」

沙那もつられて手を出す。
最初は知らない子がおにだった。
おにが十数える間に、沙那と深雪は全力で逃げる。

追われて、追って。
知らない子でもタッチして、タッチされて。
初めて走ることを楽しいと思った。
初めて、遊ぶことが楽しいと知った。

そして初めて、友達ができた。

それが、一番嬉しかった……。

深雪とさよならする時も、自然とまたねと言えた。
また遊べるという自信が何故かあった。

それから週末は深雪と遊ぶようになった。
校区が違うのか、小学校は違い、会えるのは週末だけだった。
それでも、沙那は十分だった。
深雪と会ってからたくさん笑って、たくさん話をした。知らない場所にもたくさん行った。

そして、夏が始まるころ、両親の離婚が決まった。
沙那は泣きじゃくっていた。
両親が離婚するのが嫌なのではなく、ここから引っ越して、深雪に会えなくなるのが嫌だった。
深雪にもなんて言えばいいのか分からなくて、泣きながら言った内容も伝わったかどうかは分からない。
ただ、もう会えないんだと、それだけを繰り返していた……。

そして、深雪も泣いていた。

「……ぐすっ…しゃ、写真…写真とろ」

「…写真？」

沙那は泣きはらした顔で深雪を見上げる。

「うん。一緒にいたことが一生消えないように」

深雪の目からは涙がこぼれていたが、顔は笑っていた。
その顔を見ていると、なんだかまた会えるような気がした。

「はいチーズ」

そうやって撮られた写真は二枚。

一枚は沙那の部屋に、一枚はここにある。

その後沙那は隣の市に移り、そこで母親に育てられた。そして四つ葉学院に入学し、深雪と再会したのだった……。

ごめんなさい

「俺の知ってる神崎からは想像もつかないな」

愛沢さんが一通り話し終えると早川君がそう呟いた。

当の本人の私は口が開いたまま塞がらない。

愛沢さんが話し出してすぐにさくらちゃんのことは思い出した。

そして、そのことに気づかなかった自分がすごく恥ずかしくなった。

「再会した時、すぐにわかったわ。髪も長くなってたけど深雪だったから」

「じゃぁなんで……」

早川君は言いかけてやめた。

だけどその続きは分かる。

“じゃぁなんでいじめたんだ”

愛沢さんはついと視線を写真に落とした。

「八当たり……だったのかもね。深雪を見てると昔の私を見てるみたいで……人に馬鹿にされるのを聞いても、昔みたいに言い返さない深雪に苛立ったの」

早川君は黙ったままだった。

愛沢さんは本当はね、と続けた。

「ひさしぶりって言おうと思ったのよ。そしたら怯えた顔をしたから……昔の私が重なって気付いたら酷い言葉を吐いていたの」

“何？　その顔。何が怖いの？”

覚えている。愛沢さんが私に最初に言った言葉だ。

「言ってからすごく後悔した……けどさらに怯えた深雪を見て我慢出来なかったの」

“言いたいことがあるならはっきりといいなさいよ！”

昔の深雪はこんなんじゃなかったじゃない！

私に、あんなに元気に笑いかけてくれたじゃない！

「後で謝って、それで今度は昔のお礼もしようと思ってたの。でも、次の日からクラスの子たちが深雪をいじめ始めて、私はそのリーダーになってた。毎日謝ろうって思ってたのに、いじめがエスカレートするにつれて、謝って、私がさくらだってばれて、嫌われるのが怖くなったの」

最低でしょと最後に愛沢さんは呟いた。

私は愛沢さんが話す真実に、涙がこみ上げてきた。

私は今愛里なんだと言い聞かせても止まらない。

悔しいのか嬉しいのか悲しいのか。わけのわからない涙で視界が霞んだ。

愛沢さんが伝えてくれたんだから……私も、伝えなきゃ。

「深雪は……そのさくらちゃんと会わなくなったころから、いじめられたの」

「え？」

愛沢さんが顔を上げて、早川君が息を飲む音が聞こえた。

その始まりも突然だった。いつものように男の子たちとはしゃいでたらいきなり首根っこを掴まれた。

驚いて振り返ると、仲良く遊んでいた友達たちが立っていた。

「うざいって。いつも笑ってばっかでムカつくって……」

どういうことって言ったら、そうやっては向ってくるとこが可愛くないのだと蹴られた。

「みんなで無視して、私もその一人だった」

私も、自分自身を無視した。

自分がどうなっていても、他人ごとのように振舞っていた。そうすると、少し楽だったから。

そうやって私は逃げたんだ。

「その少し後に、深雪は親の都合で転校することになって」

正直嬉しかった。せいせいして、もうあんな奴らと一緒にいなくてすむと思うと転校が楽しみだった。

「深雪とはそれからはメールでしかやりとりはなくなったの」

そして転校先ではなるべく大人しくひかえめでいるようにした。
「はしゃいでるとまたいじめられるからって、彼女は言ってた」
友達もあまり作らなくなった。
「だけど、こんどは地味で暗いって理由でいじめられるようになった」
その時仲の良かった子まで私の悪口を言っているのを聞いて、何も信じられなくなった。
それで、どんどん自分の殻にこもっていった。
いつも伏し目がちで、誰かと目があったら何かを言われそうで怖かった。
「私が聞いたのはここまで……」
そっと二人の表情を盗み見ると二人とも辛そうにしていた。
たぶん、自分自身を責めている。
それは私も一緒……。
もう私には伝えることしかできない
私たちはしばらく黙ったままだった。
それぞれが心のなかで深雪と話している。
私は、記憶が繋がっていくのを感じた。
それは失った記憶ではなく、遠い過去の封じ込めていた記憶。
そしてそれは愛沢さんが帰ろうと言うまで繋がり続けた。

階段を下りて玄関に向かう途中、リビングにお兄ちゃんがいた。
お兄ちゃんは私たちに気づいて、顔をこちらに向けた。
お兄ちゃんはソファーに座って時計を眺めていたらしい。
再び時計を見て、もうこんな時間かと低く呟いた。

「あの日から、時間が止まったみたいでね……二人は、深雪とはどういう関係だったんだい？」

「私は小学校のころの友達で……たびたびメールをしてたんです」

お兄ちゃんに敬語を使う違和感と寂しさとが同時に押し寄せる。

「俺は……神崎が好きだったんです」

「深雪を…？」

これにはお兄ちゃんも驚きを隠せないらしい。
早川君……聞いてるこっちは恥ずかしいんですけど。

「そう、か。じゃあもしかしたら俺の義弟になってたのかもしれないんだな」

そう言って笑う声にも力は無くて、表情からも悲しさが消えることは無かった。

お兄ちゃん……。

私はこんなお兄ちゃんは知らない。
私の知っているお兄ちゃんはいつもくだらないギャグを言って家族を笑わせていた。

「深雪にはこんな姿見せられないな……きっと笑われる」

お兄ちゃん、気づいて。

私だよ！　深雪だよ！　ここにいるのに……。

私は強く唇を噛みしめた。そうでもしないとまた涙がこぼれそうだった。

その時、玄関の扉が開く音がした。

音につられて全員の視線がそちらに注がれる。

リビングのドアを開けて入ってきたのはお父さんだった。

お父さんは少し驚いた顔で私たちを見たけど、すぐに痛々しく微笑んだ。

「いらっしゃい。深雪のお友達だね」

お父さんは持っていた花をテーブルに置いた。

もしかして……毎日取り替えてるの？

確かに行くたびに花の種類は変わっていた。

だけど、そんな……。

「あ、あの、おか……おばさんは？」

私は訊かずにはいられなかった。

お母さんの仕事は三時には終わる。普通ならこの時間は家にいるはずなのに

「たぶん墓だよ」

お兄ちゃんが時計を見ながら答えてくれた。

「いつもこの時間帯はそこにいる」

「あの、ごめんなさい……変なこと訊いて」

違う！　そんなことを謝りたいんじゃないのに。

どうしても、ごめんなさいと言えなかった。

死んで、ごめんなさいと。

私はわかって無かったんだ。

死んだら、みんなが悲しむってこと。

お兄ちゃんも、お父さんもお母さんも、みんなの人生を変えてしまうってこと。

私は体が震えるのを必死で押し殺していた。

なんで、死にたいなんて思ったんだろう。

なんで自殺なんてしてしまったんだろう！

ごめんなさい、ごめんなさい。ごめんなさい！

「……今日は、お邪魔しました」

代わりにでた言葉はカラッカラで、私は家族に背を向けて家から出た。

数歩歩くと涙で前が見えない。

声を押し殺そうとするけど、難しくて、歩くたびにその振動で胸の栓が抜けそうだった。

だいぶ歩いて、曲がり角まで来た時、二人がふいに私の頭を撫でた。

もう、限界だった。

胸の栓が弾け飛んで、私は声を上げて泣き出した。

愛沢さんがそっと抱きしめてくれる。

早川君も頭を撫でてくれた。

二人の優しさが嬉しくて、だけど申し訳なくて。彼らを騙しているのが辛くて。

ただ私はごめんなさいとうわ言のように繰り返していた。

家に帰っても、何もやる気が起きなくて、すぐにベッドにもぐりこんだ。

愛里はそんな私を気遣ってか、何も言わずに傍にいてくれた。

私は何も知らなかった。

何も知ろうとはしなかった……それがどれだけ罪なことかも知らずに。

動き出すもの

翌日、教室の雰囲気は元に戻っていた。
まだ私を敵意のある目で見る人はいるけど実行に移す気はないらしい。
よほど二人の言葉が効いたのだろう。
ぽつぽつと愛沢さんは話しかけてくれるようになった。早川君も挨拶を返してくれるようになった。

そしてそのまま三日が過ぎ、その間私は千春にスカーフのことをなかなか聞き出せないでいた。
どうしてあそこに二人のスカーフがあるのか。
約束とはなんなのか。
だけど、楽しそうに笑っている千春にこの話を出すのは気が引けた。
この話をすれば嫌でも私を思い出すだろう。
千春の笑顔が曇るのは嫌だった。

「ねぇ愛里ちゃん」

いつものように千春は笑顔で話しかけてくる。

「明日さ、深雪ちゃんのお墓参りしない？」

顔と言葉の内容に少しギャップを感じて私はすぐに返事が出来なかった。

「……え？」

「実はさ、明日事故から一か月が経つの」
もうそんなに経つんだ。
「だからよかったらって」
「うん、行く」
私が答えると千春は嬉しそうな顔で、深雪ちゃんも喜ぶよ、と微笑んだ。
そして話題は別の物へと変わった。

「ふ～ん。ここ数日でけっこう進んだじゃない」
家に帰って近況を愛里に報告すると彼女は満足そうに胸をのけぞらせた。
あと少しのけぞると頭から転ぶだろう。
「それで明日は墓参りと」
「うん……」
「何よ。浮かない顔ね」
愛里はとてとてと歩いて、私の膝の上に乗った。
「記憶が戻ったら、帰らなくちゃいけないんだよね」

「当たり前じゃない。貴女は一度死んでるんだから」
死んでいる、その言葉がいまさら私の上に重くのしかかる。
「そう……だよね」
最初はすぐにでも帰りたかったのに、今は帰りたくないと思ってる。
他の人の心を知れば知るほど、もっと知りたくなる。
「ねぇ愛里。愛里はなんで私に体を貸してるの？」
私はふと疑問に思ってそう問いかけてみた。
膝の上のうさぎはぴしっと固まって、ゆっくり耳がたれた。
だが次の瞬間にはそれが勢いよく上に伸びた。
「あ、あのおばあさんに脅されたのよ！　協力しなきゃ地獄に落とすって！」
耳をぶんぶんふって愛里は答えた。
「あ～あのおばあさんならやりそう」
愛里の珍しい行動に私は目を丸くしながらうさぎを撫でた。
そんなに焦るような脅され方をしたのだろうか。
「もう！　急に変なこと訊かないでよ！」
「ごめんごめん」

私が耳の形を整えてあげると、気持ちよさそうにひげをそよがせた。

こういうとこリアルよね。

私は変に感心してしまって、気づけばけっこうな時間を愛里で遊んでしまっていた……。

千春との約束

こっちに戻ってから、自分の墓に参るのはこれで三度目だった。
この墓石の前に立つたびに気持ちは変わっている。
そして私自身も変わっている。

私たちは学校が終わると制服のまま線香とお供え物を持って墓地へと向かった。
彼岸でもなんでもない普通の日。
墓地には人がいるはずもなく、しんみりとした雰囲気の中、私たちは静かに手を合わせた。

おばあちゃん……。
私、もう少し頑張るね。
そっちで……会えた時に褒めてもらえるように。

私はそっと目を開け、隣でまだ手を合わせている千春の横顔を見た。
聞くのは、今しかない。

「ねぇ千春。訊きたいことがあるんだけど」

千春は私の方へ顔を向けて小首をかしげた。

「何？」

「屋上にね、深雪のスカーフがあったの……もう一つのスカーフは千春のだよね」

千春は少し驚いた顔をしたけれど、すぐに笑顔に戻った。
「そうだよ。私と深雪で結んだの」
「深雪……と？」
なんで？　私たちの間に何があったの？
「うん。愛里ちゃんは深雪とメル友だったんだよね」
「え、うん」
「深雪がいじめられてたのも知ってるんだよね」
千春の声に寂しさが混じる。
私は千春の顔を見てられなくて、墓石に視線を移した。
「……聞いた」
「私は、深雪を守ることが出来なくて、一人にさせちゃったの」
千春、気にしないで。
私は千春がいてくれただけで十分だったんだから……。
「約束のしるしなんだ。もう、思い出話だけど……あの日、私はクラブが長引いて、一人帰ろうと校門を出たの――」
千春が下駄箱で靴を履いて、昇降口を出ようとした瞬間、視界を何かが横切った。興味が湧いてそれを探してみる。それは上から降

って来たようで、昇降口の隣の植え込みに落ちていた。
それは、生徒の上靴だった。千春は不思議に思ってそれをよく見た。大抵上靴には名前が書いてあるはずだ。
そして書かれている名前を目にした瞬間、千春は踵を返して校舎に駆け戻った。
頭よりも体が先に動く。
屋上に続く階段を靴下のまま駆け上った。

あれは深雪のものだった！
なんで？　どうして深雪のものがあそこにいるの？

不安は焦燥を呼んで、胸の中に広がっていく。

うそだ、やだよ……深雪！

深雪はフェンスに腰を下ろしてボーと景色を見ていた。

死んでしまいたい……。
今、ここから降りたら死ねるよね。
このままちょっとフェンスを蹴るだけで向こうに落ちる。
深雪は視線を下にやる。
すると等間隔に植えられた木が目に入る。
そして無愛想なコンクリート。
これくらいの高さがあったら死ねる。

死んじゃおっかな。
別にいいよね……もう疲れたし。
ここで死んじゃうのが一番いい。
みんなに私の苦しみを伝えられるから。

死。

楽になれるかな？

深雪は片方の靴を落としてみた。それはまっすぐ落ちて、植え込みの中に紛れた。自分も、ああやって落ちるのだ。

そういえば、自殺する時って靴を脱ぐよね。

なんでかな。

深雪は無機質な空を見上げる。そのまま吸い込まれてしまいそうな空。

あ、そっか。気づいてほしいんだ。自分がそこにいたこと……みんな一緒なんだ。

もう片方の靴も落とそうとした時、後ろで扉が大きく開かれた音がした。

なんだろう……。

深雪が後ろに首をめぐらせようとした瞬間、ぐっと後ろに重心が傾いて空が見えた。

あれ？

落ちた？　死ねる？

しかし、落下の衝撃は思ったよりも早かった。

「っ……痛い」

頭は打たなかったが背中が痛い。

深雪はなんで痛いんだろうと空を瞳に映しながら考えていた。

何が起こったの？
深雪はゆっくりと上体を起こし、首を巡らせる。
そして左に顔を向けた瞬間、鋭い痛みが頬に走った。
その痛みに深雪ははっと我にかえり、初めて傍に人が座っていることに気づいた。

「ち、千春？」

千春は息を切らし、目には涙を浮かべていた。

どうして千春がここにいるの？
私……。

「深雪のバカ！」

千春はまだ痛みの残る右手をぐっと握りこんだ。
この手があと少し深雪の服に届くのが遅かったら、深雪に触れられなかったら……。

「勝手に死なないで！」

深雪は千春の必死な形相に、自分のやろうとしていたことを思い出した。

見られた？

「残され側の気持ちも考えてよ！」

深雪は千春の顔を見れず何も言葉を返せないまま俯いた。
ただたった一人の友達に心配されて、迷惑をかけてしまったこと

が情けなかった。
千春を泣かせてしまっていることが何よりも辛かった。
「なんで何も言ってくれなかったの？」
千春の悲痛な言葉は深雪の胸に深く突き刺さる。
「……ごめん」
深雪にはそう言うしかなかった。
千春はその言葉を聞くと弾かれたように頭を振って服の袖で涙を拭った。
「違う……謝らないで」
違うの、悪いのは深雪じゃない。
私は分かってた。
深雪が話しかけてこないのも、一緒に帰らないのも、全部私を守るだめだったって。
「ごめんね……深雪が辛い時に傍にいられなかった……こんなの友達じゃないよね」
千春……。
「友達だよ」
大切な、大切な友達
「私、深雪の優しさに甘えてばっかで、何の役にも立てなくて」

千春はまた眼尻を袖で拭った。

「いいの、そんなこと思わないで…私は、千春が笑っていてくれるだけでいい」

千春の笑顔に私は何度も救われた……。

「深雪……約束して。私はいつも笑顔でいるから、深雪も死のうなんてしないで」

千春の声は力強くて、その目は真っ直ぐ深雪を捉えていた。

「うん。約束。もう、負けない」

生きたい……。

初めて、そう思えた。

千春がいてくれる。私はまだやれる。

「じゃぁ、約束の印残しておかない？」

「しるし？」

うん、と千春は頷いて、深雪のスカーフを抜き取った。

そして自分のも引き抜く。

「これを結んでおくの」

千春はフェンスの際に歩み寄ると二つのスカーフを一緒に括りつけた。

「これで、絶対忘れないでしょ」

そう言って笑う千春があまりにも無邪気で、深雪もつられて笑っていた。

「久しぶりに深雪の笑った顔を見た」

そう言われて初めて深雪は自分が笑っていることに気づいた。

「そうかも」

屋上には二人の女の子の笑い声が響いた。

二人のスカーフは夕日を受けて鮮やかに揺れていた……。

私は千春の話が終わっても、すぐに言葉を発せられなかった。

謎は一つ解けた……でもその約束を破ってしまった自分が許せない。

千春はずっと約束を守ってくれているのに…

「なんか不思議な感じ」

千春は私の方を向いていつもの笑顔を見せた。

「お墓の前だからかな、深雪ちゃんに聞いてもらえた気がする」

おかしいよね、と千春はくすくす笑った。

「深雪はきっとありがとうって言ってるよ……千春みたいな友達がいて嬉しかったって」

「だと……いいな」

「私にはわかるよ」

千春はうん、とひとつ大きく頷くと一歩踏み出した。

「なんか話したらすっきりした。私は帰るけど、愛里ちゃんはどうする？」

「私は……もう少しここにいる」

もう少しここで考えていたい。

「わかった。じゃぁ、また明日ね」

「うん。また明日」

そして千春の背中を見送ると、私は向かいのお墓の階段に腰をおろした。

また明日……。

その言葉を口にしたとたん明日が遠くに感じた。

そっか、私に明日がある確証はないんだ。

何が最後の記憶なのかはわからないけど、確実に最後に近づいている……。

何を思い出せばお終いなのかは分からない。
死ぬ前の私はどんなのだったの？
今の私よりも多くのことを知ってたの？
それとも今の私の方が知ってるの？

知るほど、私の欠けた部分が埋まっていくほどに不安は大きくなる。

私……。

「愛里？」

私はその声にはっと我にかえって顔を上げた。

「まさかとは思ったけど、やっぱり来てたのね」

愛沢さんは花と線香を片手にこちらに近づいてきた。

「あ、愛沢さん」

「墓の前でそんなしみったれた顔されると怖いんだけど？」

そして愛沢さんは墓の前まで行くと、花を置いて手を合わした。

深雪……ごめんね。
私が、あの時あんなこと言わなかったら……。
それと、深雪と同じ目をする子を見つけたわ
貴女と同じ、強い意志を持った目。
そして、貴女と同じ、人を強くする子よ。

愛沢さんはふっと息をついて振り返った。
「本当に、あなたたちはいつも私が折れそうな時に現れるのね」
愛沢さんの独り言のような言葉がかすかに聞こえた。
「え？」
なんて言ったの？
「ねぇ愛里、明日会えない？」
愛沢さんの声は決意を含んだ、涼しい声だった。
「……何で？」
明日は土曜日、予定は何もないが。
「話しておきたいことがあるの」
話？　あれ以上にまだあるの？
「いいけど」
何だろう。
気になったけど、愛沢さんの顔が何時になく真剣だったから訊けなかった。
「どこか、ゆっくり話せるところは……」

「あ、駅前の公園は？」

私の頭にふと、広い公園の景色が浮かんだ。
たしかあそこはベンチの数も多かったはずだ。
愛沢さんは複雑そうな顔で、公園、と呟いた。

「そうね……そこがいいわ」

「何時にいけばいい？」

「……十時に」

「わかった」

愛沢さんが何かを伝えたいのなら、私はちゃんと受け止めなくちゃいけない

深雪の時には、出来なかったから……。

「気をつけて、来てね」

「子供じゃないのに」

愛沢さんはくすくす笑って墓の階段を下りた。

「そうだったわね」

そして私は愛沢さんと一緒に墓を後にして家に帰った。
その間、妙に気をつけての一言が引っ掛かっていた。
なんで、あんなことを言ったんだろう。

確かに、駅前は車どおり多いしなぁ。

明日……私はまた何かを知るのかな。

最後のカケラ

翌日は雨だった。
どんよりと重い雲から、雫がしとしと降っている。
窓の外を眺めて私はため息をつく。

何もこんな日に降らなくてもいいのに……。
傘さして行かないとね。

私はお気に入りの服に着替えて、公園へと向かった。
待ち合わせは家から数十分歩いた所にある公園だった。けっこう大きい所で、よく待ち合わせに使われる、噴水のある綺麗な公園だ。
私は横断歩道を渡って、公園へと入った。
そして首を巡らせ愛沢さんを探す。
愛沢さんはピンクの傘をさして、噴水の前に立っていた。

「愛沢さん、おはよ。待った？」

愛沢さんは私を見ると、安心したような顔で、

「別に」

と言葉を返した。

「雨降ってるけど、場所移す？」

「ううん。ここでいい」

愛沢さんの顔は、傘で隠れて見えなくなった。
私は愛沢さんの言葉をじっと待つ。
愛沢さんは、何かを覚悟している、そう私は思った。
「突然ごめんね。でも、愛里には知っておいてほしかったの。あの子と、同じものを感じさせる貴女には」
愛沢さんはゆっくり、言葉を選んで話していた。
「あのね、愛里。深雪ね、深雪はね……私が殺したのよ」
小さな声だけど、芯の通った声だった。
私は息が苦しくなる。それは、真実だから。
私は愛沢さんにいじめられて、自殺した。
憎いはずなのに、愛沢さんの告白が苦しい。
「あの日、私は深雪をここに呼び出したの。話をするために」
私は伏せていた顔をあげた。愛沢さんの顔は見えない。そして、その話を私は知らない。
「は、話？」
「そう、私が深雪をいじめてた理由を、言うつもりだった……」
知らない。そんなの記憶にない。
私の頭は混乱していく。聞きたいのに、聞きたくない。知るのが怖い。
「なん、で？」

「……その前日に、訊かれたから。いつものようにいじめてたら、突然怒りのこもった目で見られて、理由を訊かれた」

嘘だ。そんなことできるはずがない。私はあんなに愛沢さんが怖かったのに。

「……深雪が？」

「そう。約束をしたって、言ったの。あなたには負けないって……」

約束……千春との？　私は、あれに勇気をもらった……？

「だから呼び出したの。ほんとは、いじめてる自分が、嫌で……怖かったから」

だけど、死んだのは私なんだ。私が死んだのは、誰でもない、自分の弱さのせい……。

「でも、深雪はこなかった。約束の時間を一時間も過ぎても来なかった。私は腹が立ったわ……明日からもっとひどいことをしてやろうって思った。そして次の日……私は深雪が事故に遭ったことを、知ったの」

ゆっくりと紡がれる言葉は、欠けていたピースのように私の中にはまっていった。

「担任が来て、深雪の事故を告げた時、すぐに私のせいだってわかった。深雪は、私に会いにこようとして事故に遭ったのよ。私が呼び出していなければ、場所を変えていれば……あの子は生きていた」

「……事故、で、死んだ？」

私は、自殺してない……？　車？　事故？

「そうよ……私が、殺したのよ！」

張り裂けるような愛沢さんの叫びに、私は傘を手放して愛沢さんの傘に入った。

愛沢さんは、泣いていた。

自分を責めて、ずっと責め続けていた。

私は力強く愛沢さんを抱きしめた。とめどなく涙が溢れる。

「違う、愛沢さんの、せいじゃない。誰も悪くなんて無い」

愛沢さんは力なく首を横に振った。

「誰かに許して欲しいなら、私が許すから。そんなに自分を責めないで……」

私が流している涙は、悔し涙だった。

愛沢さんがこんなに苦しんでいたのに、私は自分のことばかりだった……

「深雪は、私を怨んでる。許しはしない」

「許す。必ず許すよ。私にはわかる」

「それでも、私は……」

私たちはしばらくそのまま泣きあっていた。
雨が音を、私たちの存在も、全てを流しているようだった。
それから、どちらからともなく、さよならを言って、公園を後にした。
悲しみや、後悔や、寂しさや、悔しさが私の中で渦巻いていた。
ただ、これだけは分かった。
これが、最後のかけらだ……。
記憶は繋がった。繋がって、しまった……。

家に帰り、私の部屋のドアを開けると、そこに部屋はなかった。
ここに来た時と同じ、真白な世界。
私の姿は深雪に戻っていた。
目の前に、おばあさんと人間の愛里がいた。
いつも鏡で見る姿と同じ愛里は、駆け寄るなり私を抱きしめた。

「おめでとう、深雪！」

私はすぐに言葉がでない。本当なら、飛び上がって喜ぶはずなのに、ずっとそう願っていたはずなのに、嬉しさを感じられなかった。

「全ての記憶が集まったわ。これで帰れるのよん」

おばあさんは上を指さした。そこには落ちてきたのと同じ穴。その奥には天井が見える。
おそらく、おばあさんの家の天井だ。

「帰る……」

「そうよん。やっと死ねるわよん」

死ぬ……。

そう考えたら、涙が出てきた。私はとっくに死んでいるのに、また死ぬのが怖い。

みんなに、もう会えない……。やっと、仲良くなれたのに。やっと、みんなの本当の姿を知ったのに……。

もう、会えないの？

「どうしたの？　深雪」

愛里が心配そうに私の顔を覗き込んだ。

愛里……いつも、私を支えてくれた。愛里には愛里の人生がある。この体を返さないといけない……でも。

「おばあさん。もう一度、あの世界に戻してもらえますか？」

不思議と気持ちは落ち着いていた。おばあさんは探るような目で私を見ている。

「私、やり残したことがあるんです」

「大事なものなのん？」

「はい」

おばあさんは肩をすくめ、一人上に上がっていった。

「用が終わったら、私を呼ぶのよん」

「……はい」

おばあさんが穴から出ると、景色は部屋に戻った。

私は愛里で、愛里はうさぎの人形の姿だ。

「深雪？　何をするの？」

私は愛里の心配そうな声を聞きながら、机の前に座った。

「私の、生きた証を残すの」

私はペンを握る。

私は、まだ何も返せていない。まだ、間に合う。まだ、終わりじゃないの……。

最後のカケラ（後書き）

終わりそうに見えて、まだです。あと少し、お付き合いをお願いします。

はじまりの記憶

「いいかげんに、してよ……。なんで、いつも私を、いじめるの？」

とぎれとぎれの言葉。私を支えているのは千春との約束。

私は、昔の自分を思い出して、懸命に声を振り絞った。

愛沢さんの目が驚きで開かれる。回りの女の子たちは、口応えをしだしたと騒ぎだした。

愛沢さんの手が震えている。たぶん、怒っているのだろう。その手が飛んでくるのも、時間の問題のはずだった。

「いいわ、そんなに知りたいなら教えてあげる。今日、四時に駅前の公園に来て。もちろん一人でね」

拳のかわりに飛んできたのは、誘いだった。

女の子たちは、とうとうやるのね、と意気込んでいる。

私は終わった、と思った。

愛沢さんを怒らせてしまった。行けばひどいことをされる。だけど、行かないともっとひどくなる。

本当に理由を教えてくれるんだろうか。

私……どうすればいい？　千春……。

愛沢さんはそう言うと、さっさと自分の席に戻っていった。

私はその後、ずっと気分が悪かった。恐怖が体を蝕んでいた。

やっぱり逆らわなければよかった。今さら何も変わらないのに……。

家に帰っても、決心はなかなかつかなかった。時間は迫る。足は動かない。

“約束よ”

玄関で立ちすくんでいると、千春の声がした。生きてと願った友達。ずっと、心配してくれていた友達。

約束、したじゃない。負けないって。

私は制服のまま、家を飛び出した。

約束の場所は、家から数十分も歩けば着く。

まだ、間に合う。

私は横断歩道で立ち止まった。丁度半分を歩いたぐらいだ。腕時計を見て時刻を確認する。

大丈夫。間に合う。

そして顔を上げた時、私に向かってくる車が見えた。信号で止まる素振りも見せず、ただこちらに猛然と向かってくる。

危ない、そう思った。

生きなくちゃ、とも思った。

だけど、意に反して足は動かない。頭だけが先走る。

死なないと、約束したのに！　動いて！　私の体！

私の体は動いた。高く、高く。空に届きそうなくらい高く。

見えたのは、青い空だった。おかしなくらい綺麗な空。雲が流れ、澄みわたっている。

世界は、回っている……。

なんだか悲しくて、寂しくて、愛沢さんとの約束が守れなくて、申し訳なかった。

そして私は、意識を手放した。

私は、こうして死んだんだ。

繋がった記憶。折り重なるみんなの思い。

この記憶を無くさなかったら、無色のままだった。私は単調な色しか、つけることができなかった。でも、みんなを知った。色を知った。

お別れを、しないといけない。

この世界に、みんなに……。

私はベッドから起き上がった。今日は学校がある。愛里はまだ寝ていた。

今日で終わるから、もうちょっと待ってね。

私は愛里を撫でて、身支度をする。念入りに櫛で髪をとく。

そして朝ご飯を食べて、いつもより早めに家を出た。

向かったのは私のお墓。朝霧がうっすらとかかっている墓地は、少し不気味だった。

私はその前で静かに手を合わせる。

おばあちゃん。私、全部わかったよ。
私ね、みんなが大好きだった。私は弱くて、間違いもたくさんしたけど、そんな自分が、一番好き……。

私は鞄から手紙を三通取り出して墓石の上に置いた。家族に宛てた手紙だ。
一生分のありがとうを込めた手紙。
これを読んで、少しでも明日を楽しみにできればと思う。私は、笑ってる家族が好きなんだ。

つまらないギャグで笑いの中心だったお兄ちゃん。
仕事ばっかりだったけど、運動会で一緒に走ってくれたお父さん。
いつもおいしいご飯を作ってくれたお母さん。
みんな、みんな大好き。
私は眼を開けて、すっと息を吸った。

「行ってきます」

私はにっこり笑って学校へと歩きだした。
いってらっしゃい、と言ってくれているのを感じながら……。

さよなら世界

学校はいつも同じ顔を見せる。
教室に入ると、愛沢さんが声をかけてくれた。少し気恥ずかしそうにしている愛沢さんに、私は放課後屋上に来てくれるように頼んだ。

「いいわよ」

とあっさり頷いてくれる。
私は、それを千春と早川くんにも伝えた。
二人ともすぐに頷いてくれた。

授業中、私は窓の外を見ていた。外の向こうに広がるのは、今日私がお別れする世界。
教室の中にあるのは、私がお別れしたくない世界。
だけど、もう答えは出ている。

そして、放課後になった……。

私は屋上へと続く階段を一歩一歩、今までの人生を踏みしめるように上っていく。
私は、変わった。
なら、その証を残さなきゃ。
屋上にはみんな集まっていた。私がつくと談笑が止んで、みんなが私の言葉を待った。

「あのね、みんな。伝えたいことがあるの」

「なに？」

愛沢さんが優しい声で続きを促した。千春も頷いた。

「私ね。みんなが嫌いだった。そして何より自分が嫌いだった。辛いのは、自分だけだって思い込んでた。だけど、千春と約束して、早川君の気持ちを知って、愛沢さんの苦しみを聞いて、みんなが好きになったの。そして、私を、みんなが見てくれる私を、好きになった」

みんなが私を見ていた。静かに私の話を聞いてくれる。今私がどんな顔をしているのかは分からない。できれば、笑っていたいな。

「早川君。私ね、早川君の告白を聞いて、本当に嬉しかったの。ずっと、私は生きる価値なんてない人間で、誰からも見られていないと思ってたから。ありがとう……大好きだよ」

「あぁ。俺も、好きだ」

早川君は悲しい顔で、無理に笑おうとしていた。

「愛沢さん。ううん、さくらちゃん。ごめんね思い出せなくて、たくさん話したいことあったのにね。私鈍感だから、言われないとわからないの。私、さくらちゃんがどれだけ優しいか知ってるよ。だから、もう苦しまないで。私は、勝気なさくらちゃんが、大好き」

「ごめんね……ありがと。大好きな私の、友達……」

愛沢さんは仕方ないなって笑った。柔らかくて、優しい笑顔。ま

た、愛沢さんの、さくらちゃんのいいところを見つけた。

「千春。ずっと一緒にいてくれてありがとう。私、あなたがいなかったらとっくの昔にダメになってた。千春……私、千春の親友だったことを誇りに思う。大好きなんかじゃ、足りないくらい」

「……大好き。最初で、最後の親友よ。幸栄に思ってよね！」

千春はずっと笑っていた。約束を、ずっと守ってくれている。

だから私も、とびっきりの笑顔を作った。

私は一人一人の顔をもう一度見た。

伝えたい。私が私であることを。消えてもいい、消えたっていい……。

「あのね、私……実はね」

深雪なんだ、って言おうとしたら三人に抱きしめられた。みんなのぬくもりが伝わる。

「言うな」

「言わなくていいわよ」

「わかってるから」

みんな……？

「わ、私ね、帰らないといけないの」

「うん」

「みんなと、もう……会えない」

「……うん」

会えない、と言った瞬間、涙があふれてきた。あんなに泣くものかと思っていたのに。

最後は、笑って別れたかったのに。

みんなの腕に力がこもった。思いが伝わってくる。

みんな、もう分かっている。

もう、堪え切れなかった。

「う、うぅ……帰りたく、ないよぅ……もっと、みんなといたい。いたいのに」

涙で声がかすれて、とぎれとぎれになる。

「行くなよ」

「一緒に、いよ？」

「やっと、友達に……なれたじゃない」

みんな、わかってる。でも、甘えてもいい？　もうちょっと、みんなの優しさに甘えても、いい？

私は、言いわけの聞かない子どものように泣きじゃくった。よしよしって、頭を撫でてくれる手が嬉しくて、握ってくれる手が暖かくて、どんどん別れるのが辛くなる。

聞こえる鼓動が、生きてることを教えてくれる。

「大好き、大好き」

涙でぐずぐずになりながら、私は何度も何度も繰り返した。
どれくらい、そうやってたか分からない。
気づいたら、私の目は屋上のドアを見ていた。なぜか、引きこまれる。
帰りたくない。でも、帰らなくっちゃいけない。

「帰る……の？」

千春が、私の視線に気づいたのか不安げに瞳を揺らした。
帰る？　そう言われて気がつく。
帰るんじゃないんだ。だって、私の居場所はここだから。

「私、待ってる。帰るんじゃないよ……私、ここにいるもの。ずっと、ずっと……」

誰かが、そっと私の背中を押してくれた。
きっと、私の揺れる心はばれてた。だからみんな、こうやって送り出してくれる……。
私はゆっくり、ゆっくり、ドアへと向かった。私の手を握っていた手がそっと離れた。
私は戸口で一度振り返る。

「絶対、待ってなさいよ？　待ってないと、私怒るからね」

目尻をぬぐう愛沢さん。

「う～んと、おばあちゃんになって、行くから。間違えないでね」

大好きな笑顔をくれる千春。
「忘れない。必ず会いに行く」
初めての恋人、早川君。
「またね。みんな」
さよならじゃない。私たちはまた会える。
「またね」
「またな」
三人の声は、一つになった。
「ありがとう……深雪」
私はくしゃりと笑って、一歩を踏み出した。
奥から光が射し込んできて、私は真っ白な世界に包まれた。
「ばか……最後まで手がかかるんだから」
ドアの陰では、白い耳が動いていた……。

私は白い世界を歩いた。

「遅いのよん」

急におばあちゃんが私の前に現れた。おばあちゃんはうんざりした顔をしている。だけど怒ってはいない。

「で？　用事は済んだのん？」

「うん。終わった」

不思議ともう悲しくなかった。心はいつになく穏やかだ。

「愛里。あんたも今までごくろうさん」

後を向くと、うさぎの人形が立っていた。瞬き一つで人の姿に戻る。

「私の役目はこれでおしまいね」

愛里は私に手を差し出した。

「行こ。私が連れて行ってあげるわ」

私はその手を取った。

「じゃ、行くわよん？」

私の体は急浮上した。高く、高く、新しい場所へ。

私はそっと目を閉じた。

さよなら、私の大好きな世界。

こんにちは、私が大好きな人たちを待つ世界。

「ちょっとそこの君！　そう、あなたよ。ねぇあなた、記憶無くしちゃったみたいね。お姉さんについておいで」

私はあの後、おばあさんの役目を引きついだ。おばあさんの家についた私は、記憶を無くした本当の意味を知った。

「……試験？」

「そうよん。私の後任の選抜。死んだ子の中からこの世界の管理を手伝ってくれる子を選ぶのよん」

おばあさんはあっけらかんと笑って、私も年なのよん、と付け加えた。

「ちなみに愛里もその一人」

指さされた愛里は気恥かしそうに笑った。

「えぇぇっ！　よってたかって私を騙してたの？」

「いいじゃない。ここで働けばみんなを待つこともできるでしょ？」

「な、何でそれを？」

「ん？　ひ、み、つ」

愛里は私の質問を笑顔でごまかすと、すっと手を差し出した。

「まぁ、そんなわけで。これからもよろしくね。深雪」

私は少し唇をとんがらせて、その手を取った。力をこめて握り合う。

「よろしく。愛里」

みんなを待つ間に、ここの手伝いをするのも悪くない。ただ待ってるより、何倍も楽しそうだ。

私はあの世とこの世の間の世界で働いてる。

家族を想い、みんなを想いながら。

「記憶を取り戻しに元の世界に戻ってもらいます。怖い？　まさか、とても楽しいものになりますよ。保証します。ほら、道は開かれてる。大丈夫、全てを取り戻したら、あなたは素晴らしい物をもらってる」

この、私みたいにね。

さよなら世界（後書き）

ということで終了しました。
自分で読んでても批判きそうだな、とか思いつつ。
これがハッピーエンドなのか、バッドエンドなのかは読んでくださった方々の判断にお任せいたします。

最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございました。
稚拙ではございますが、何か一かけらでも伝わるものがあればと思います。

では、またどこかで。ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5945q/

最後のカケラ

2011年10月6日19時05分発行